

徳島県那賀川流域における縄文遺跡の分布とその遺物

高島芳弘¹・那賀川流域の縄文遺跡調査グループ²

The Neolithic Jomon sites and the artifacts found from the Nakagawa
River areas, southern part of Tokushima Prefecture, Japan

Yoshihiro Takashima¹ and Research Group
for Jomon Sites of the Nakagawa River Areas²

Abstract Neolithic and Paleolithic sites have been reported hitherto very scarcely from the Tokushima Prefecture except for the Yosinogawa River areas of the north. Tokushima Prefectural Museum has intended to survey to make clear geographical distribution of the Neolithic Jomon sites in the Nakagawa River areas of the southern part of the Prefecture. As a result, the survey carried out in 1991-1993 was succeeded in a collection of a large number of stone arrowheads and flakes, some other stone tools and several pieces of potteries in Jomon age from 34 sites as well as of "knife-shaped" stone tools in Late Paleolithic. Of those 34 sites of the Jomon age, 33 are newly found ones. It is noteworthy that most of those stone tools obtained are made of volcanic andesitic rock "Sanukite", which are distributed restrictively outside from the Tokushima Prefecture areas. In this paper, on representative 18 sites among 34 sites found in the Nakagawa River areas the notes on location and the artifacts yielded there are described shortly. Brief discussions are also made on archaeological and geographical situation of those sites and the problem on material movement of some stone implements.

はじめに

徳島県における縄文遺跡は数少なく、主要な遺跡は20カ所にも満たない(天羽・岡山, 1985)。鳥居龍蔵による城山貝塚の発掘(鳥居, 1976 [1923])以来、新たな遺跡はほとんど見つかっていなかったが、最近になって徐々にではあるが徳島県北部の吉野川流域では低地

¹ 徳島県立博物館, 〒770 徳島市八万町 文化の森総合公園. Tokushima Prefectural Museum, Bunka-no-Mori Park, Tokushima 770, Japan.

² 天羽利夫, 亀井節夫, 中尾賢一, 魚島純一(以上4名, 徳島県立博物館), 阿部里司(阿南市教育委員会), 北條芳隆(徳島大学総合科学部), 柏野壽一, 三宅良明(徳島市教育委員会), 寺戸恒夫(徳島文理大学). Toshio Amo, Tadao Kamei, Ken-ichi Nakao, Jun-ichi Uosima (Tokushima Prefectural Museum), Satoshi Abe (Board of Education, Anan City), Yoshitaka Hojo (Faculty of Integrated Arts and Sciences, University of Tokushima), Juichi Kashiwano, Yoshiaki Miyake (Board of Education, Tokushima City), and Tsuneo Terado (Tokushima Bunri University).

での発掘が進み、三好郡三加茂町稻持遺跡や徳島市矢野遺跡、三谷遺跡(勝浦, 1994)などでまとまった遺物が発見されるようになってきた。

ところが、徳島県南部を西から東に流れる那賀川流域における縄文時代の遺跡は、北部の吉野川流域に比べてさらに少なく、那賀郡上那賀町の古屋岩陰遺跡、阿南市福井町の中連遺跡および阿南市桑野町の^{はたえだ}甘枝遺跡が報告されているだけであった。

これらのうち古屋岩陰遺跡は、1965年に発見され(江坂・岡本, 1967; 立花, 1970)、翌1966年、徳島県博物館によって発掘調査がおこなわれ、縄文時代早期の押型文土器、条痕文土器、無文土器とともにチャート製の石鏃3点が発見された。次の中連遺跡は、1949年に福井川周辺の水田整備の際に、偶然発見されたものである。当初には土器破片が多量に採集されていたようであるが(沖野, 1960)、現在では山形突起を持つ土器の口縁部破片が阿南第二中学校に保管されているだけである。最後の甘枝遺跡は、佐藤忠男氏が1967年に自宅の宅地造成を行った際に発見したものである。ナイフ形石器とともにチャート製の石鏃9点が採集されており、縄文時代の早い時期の所産と考えられているが、土器が共伴しておらず、詳しい時期については明らかにされていない(天羽・立花, 1969)。

3遺跡ともに、わずかな資料が発見されているに過ぎず、その後も那賀川流域においては新たに縄文時代の遺跡は発見されなかった。県北の吉野川流域に比べてこの時代のことについては不明な部分が多かったのである。

こうしたことから徳島県立博物館では、那賀川流域において新たな縄文遺跡を発見し、ひいては博物館における縄文時代に関する収蔵資料と展示の充実をはかることを目的に、1991～1993年の課題調査として那賀川の上流域・中流域を中心として縄文時代の遺跡の分布調査を行った。その結果、34カ所にのぼる地点から石鏃をはじめとするサヌカイトやチャートでつくられた石器・縄文土器片ばかりでなく、弥生土器、土師器、須恵器、中近世の陶磁器なども発見した。これらの地点のうち阿南市椿町蒲生田を除けばすべて新しい遺跡の発見になる。

本稿ではこの調査の成果のうち、石器類・縄文土器を採集した遺跡について紹介するとともに、これらの遺跡の立地と石器類・縄文土器の発見の意義について検討することにした。

那賀川流域の地形・地質

那賀川は、四国東部の高峰である剣山(1995 m)の南方、那賀郡木頭村の高知と徳島の県境付近にその源を発して、北の剣山山地と南の海部山地との間を蛇行しながら東流し、阿南市で紀伊水道に注ぐ一級河川である。流路延長は125.2 km、流域面積は873.9平方kmである。流域全体の91%が山地で、残りは5%の平地と4%の水域からなり、ほとんどが山間地域を流れている。

那賀川流域の地質は西南日本外帯の一部にあたる秩父累帯の北帯および中帯によって構成され(須鎗ほか, 1991)、その大部分が中・古生代の砂岩および砂岩を主とする砂岩・泥岩互層からなり、部分的に石灰岩、チャート、緑色凝灰岩、および礫岩が挟まれている。地質構造は複雑で、断層や破碎帯が発達し、木沢村坂州地域や那賀川下流域の黒瀬川構造帯によって代表されている。

那賀川には多くの支流が注いでおり、上流では南川・海川谷川・成瀬川・坂州木頭川、中流では古屋谷川・蔭谷川・紅葉川・赤松川・谷内川・中山川などがあり、中流域では蛇行が発達する。那賀川の蛇行は、石狩川のような平野部のものとは違い、山地が隆起する前からの蛇行河川が山地の急上昇により削りこんだ穿入蛇行であり、四万十川や熊野川、富士川などと同様なパターンを示している。しかし、那賀川の蛇行はほかの川が南北に流れるのに対して、東西の方向をとっていることに特異性が見られる。また、蛇行に関して、那賀川中流域では河岸段丘が顕著に発達している。上那賀町平谷、相生町蔭谷・横石・大久保・延野から入野、鮎川にかけての地域などのように、本流が著しく蛇行したために岸が削られて、流路が短絡して内部に中山地形を残しているのが観察できる。河岸段丘は、上から中位段丘、低位段丘、新規段丘に区別できるが堆積段丘としての高位面は認められない。

調査の概要

予備調査 1990年度には、上流域・中流域全体を対象とする予備調査を木頭村、木沢村から鷺敷町にかけて行った。

予備調査では支流ごとに段丘・河川跡や岩陰を確認し、分布調査の予定地をマッピングした。調査グループの一員である柏野は、すでに単独で那賀川流域の調査をしており、相生町の鮎川と谷内でチャート製およびサヌカイト製の石鏃を採集していたので(未発表)、今回改めてその採集地点の確認を行った。

1991年度の調査(1991年11月26日、12月21～23日；1992年1月25・26日、2月1・2日)

上那賀町、相生町および日和佐町で表面採集による分布調査を行った。上流側から調査を行い、上那賀町の拝宮谷や白石では岩陰を目標として調査を進めた。大きな岩陰で水場も近く、人が生活するには条件が良い地点ではあったが、天井が崩落したと考えられる岩屑が堆積し、縄文時代のような古い時期の遺物は表面で発見できず、成果が得られなかった。海川谷川、成瀬川、丈ヶ谷川および古屋谷川流域では、河川沿いの段丘面を調査の中心とした。相生町では本流沿いの神通、花瀬、蔭谷、横石、鎌瀬、吉野、雄、築ノ上や紅葉川、谷内川、赤松川の支流ごとに分布調査を進め、日和佐町では赤松川の流域で分布調査を行った。耳瀬の岩屋神社の近くに岩陰らしきものがあり、ここからは石杵を採集したがその性格は明らかでない。他の調査地点は赤松川やその支流の流域の段丘上である。

1992年度の調査(1992年11月27日、12月11・18日、1993年1月15～17日) 木頭村および鷺敷町において表面採集による分布調査を行った。木頭村では本流沿いの助、サカモト、川島、川切、出原、和無田、南宇、西宇、下番、久留名、菖蒲野、六地藏、日浦、大城、大明池、蔭、宇井ノ瀬の各地点と折宇谷川、榎谷川の流域の河岸段丘上で分布調査を行った。なお、菖蒲野の対岸にある岩陰も調査したが、住居跡とは認定し難い。岩陰の底面には砂の堆積が見られ、本流の水量が増えたときに被水していたと思われる。鷺敷町では那賀川の本流沿いの阿井、仁宇、和食郷と南川の流域で分布調査を行った。

1993年度の調査(1994年2月26～28日、3月26～28日) 那賀川流域で数多く採集できたサヌカイト製の石器が、さらに南の海部川流域にはどのように運び込まれているのかを確認するために、補足的に海部川流域と穴喰川流域において表面採集による分布調査を行っ



番号	遺跡名	遺物
1	那賀郡木原村南宇オカダ	サヌカイト剥片・石鏃、チャート剥片
2	那賀郡上那賀町府殿日浦	サヌカイト剥片、チャート剥片、条痕文土器
3	那賀郡上那賀町御所谷半名	サヌカイト剥片
4	那賀郡上那賀町古屋久保	サヌカイト剥片
5	海部郡海南町桑原西	サヌカイト剥片・石鏃、チャート剥片・石鏃
6	海部郡牟岐町辺川くれいし	サヌカイト剥片・石鏃
7	那賀郡相生町蔭谷北	サヌカイト剥片・石鏃、チャート剥片・石鏃・石鏃・スクレイパー、黒曜石スクレイパー
8	那賀郡相生町蔭谷南	サヌカイト剥片・石鏃、チャート剥片・石鏃
9	那賀郡相生町竹ヶ谷	サヌカイト剥片、チャート剥片・楔形石器
10	那賀郡相生町西納	サヌカイト剥片・石鏃・スクレイパー、チャート剥片・楔形石器、黒曜石剥片・楔形石器
11	那賀郡相生町請ノ谷	サヌカイト剥片
12	那賀郡相生町横石鎌瀬	サヌカイト剥片
13	那賀郡相生町大久保森原	サヌカイト剥片・石鏃・石鏃、チャート剥片
14	海部郡日和佐町赤松川又	チャート剥片、珪質頁岩剥片・石匙?
15	海部郡日和佐町赤松原尻	チャート剥片、珪質頁岩石鏃
16	海部郡日和佐町赤松上寺野	サヌカイト剥片・石鏃、チャート剥片、弥生土器片
17	海部郡日和佐町赤松野田	サヌカイト剥片・石鏃・石鏃・楔形石器・スクレイパー、チャート剥片
18	海部郡日和佐町赤松高瀬	サヌカイト剥片、チャート剥片
19	那賀郡相生町吉野川口	サヌカイト剥片、チャートスクレイパー
20	那賀郡相生町中雄	サヌカイト剥片・石鏃
21	那賀郡相生町延野大原	サヌカイト剥片・ナイフ形石器・石鏃・石鏃、チャート剥片
22	那賀郡相生町谷内C	サヌカイト剥片・石鏃、チャート石鏃
23	那賀郡相生町谷内A	サヌカイト剥片・石鏃、チャート剥片・石鏃・楔形石器・スクレイパー、黒曜石石鏃
24	那賀郡相生町谷内B	サヌカイト剥片・石鏃・石鏃、チャート石鏃、条痕文土器、無文土器
25	那賀郡相生町鮎川西ノ宮	サヌカイト剥片・石鏃・石鏃・楔形石器・スクレイパー・切断調整石器、チャート剥片・石鏃・石鏃・楔形石器・スクレイパー・切断調整石器、珪質頁岩剥片・石鏃、黒曜石剥片、石鏃、磨石、縄文土器
26	那賀郡相生町鮎川大園	サヌカイト剥片・石鏃、チャート剥片
27	那賀郡相生町築ノ上（西法寺跡）	サヌカイト剥片・石鏃、チャート剥片・石鏃・楔形石器・スクレイパー
28	那賀郡鷺敷町阿井	サヌカイト剥片・石鏃・スクレイパー、チャート剥片・石鏃
29	那賀郡鷺敷町和食郷	サヌカイト剥片
30	那賀郡鷺敷町南川	サヌカイト剥片、チャート剥片
31	阿南市福井町動々原	サヌカイト剥片
32	阿南市新野町廿枝	サヌカイト剥片・石鏃・石鏃、チャート剥片・石鏃、磨製石斧
33	阿南市椿町加茂前	
34	阿南市椿町蒲生田	サヌカイト剥片・石鏃
a	那賀郡上那賀町古屋蔭谷遺跡	サヌカイトスクレイパー、チャート石鏃・楔形石器、磨石、縄文土器（押型文、無文、条痕文）、骨角器
b	阿南市桑野町廿枝遺跡	サヌカイト剥片、チャート剥片・ナイフ形石器・石鏃、酸性凝灰岩ナイフ形石器
c	阿南市福井町中連遺跡	縄文土器

図1. 那賀川流域における石器・縄文土器の採集地。

た。海部川流域では、本流沿いの寒ヶ瀬、平井、檜谷、西桑原、東桑原、檜ノ瀬、神野、若松、吉野の各地点で、小川谷川流域の上小谷、下小谷、小川谷、小川口で、相川流域の村山、坂越、室津の各地点で調査を行った。宍喰川流域では、中谷、猪ノ鼻、昏道、塩深、角坂、広岡の各地点で調査を行った。海部川、宍喰川の流域でサヌカイト製の石器はあまり採集できず、チャート製の石器についても、良好なものはほとんど採集できなかった。

なお、今回の調査の過程で、石器に関心を持たれている本田義順氏(相生町在住)が、多くの石鏃などを採集されていることを知った。遺物を借用し検討することができたので、今回あわせて紹介する。下に述べる相生町西納と相生町谷内Bのすべての遺物と相生町延野大原の大部分の遺物は、本田氏採集である。

調査の成果

今回の調査によって、木頭村1カ所、上那賀町3カ所、相生町16カ所、日和佐町5カ所、鷺敷町3カ所、阿南市4カ所、牟岐町1カ所、海南町1カ所の計34カ所で、サヌカイトやチャートでつくられた石器、縄文土器などを発見した(図1)。それらは阿南市椿町蒲生田を除いては、すべてが新しい遺跡の発見ということになる。これらの遺跡は那賀川の本流沿いよりも、支流沿いや支流に流れ込む小河川に面した段丘上や、旧河川を臨む段丘上に立地していることが多い。遺跡の立地する段丘面は河床よりの比高に差異があるが、いずれも低位段丘面に入る段丘面の上のものと判断される。

なお、木頭村の川島から黒野田に至る峠(現河床よりの比高110 m)で、火山灰を挟む成層した粗粒砂と円礫の互層が観察されたが、恐らく中位段丘の上位面にあたるものであろう。木頭村南川のキャンプ場の近くで寺戸により、ATと思われる火山灰が発見されている(東明, 1985)ので、ここの火山灰もそれにあたるかもしれない。ただし、今回採集したものは粘土化が著しく同定は不可能であった。

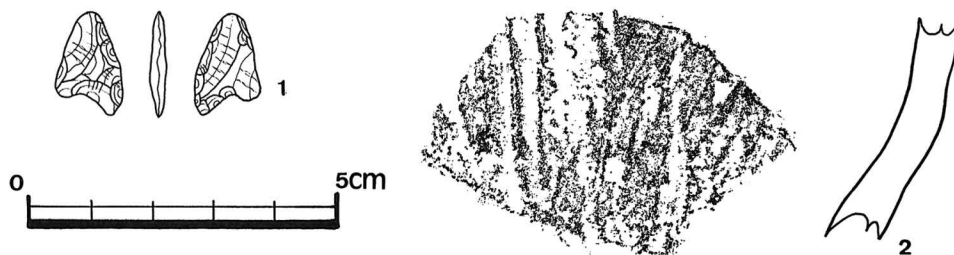
火山灰だけを採集した地点はあったが、遺物を採集した地点ではまったく火山灰を確認できなかった。残念ながら火山灰と遺物の関係については触れることができない。

これら遺物を採集した地点の中で、木頭村南宇オカダ、上那賀町府殿、相生町蔭谷北・蔭谷南、相生町西納、相生町大久保森原、海部郡日和佐町赤松川又・原尻・上寺野・野田・高瀬、相生町延野大原、相生町谷内A、相生町谷内B、相生町鮎川西ノ宮、相生町築ノ上(西法寺)、鷺敷町阿井、阿南市新野町廿枝が遺物の多い地点である。従ってここではこれらの遺跡を代表的なものとして、その立地および採集した遺物の概略について述べる。

1. 木頭村南宇オカダ(図2, 20; 図版1) 那賀川本流の右岸、標高350 m前後で、河床からの比高20 m足らずの河岸段丘上に立地する。本流から50 mほど離れており、東西150 m、南北100 m前後の範囲に遺物が分布する。

ここからはサヌカイト剥片21点、チャート剥片13点、石鏃1点(図2-1)を採集した。石鏃はサヌカイト製で、その形態は凹基で側縁が外湾している。周辺加工は進んでいない。

2. 上那賀町府殿(図2, 21; 図版1) 那賀川の支流、成瀬川左岸、標高は300 m前後で、河床からの比高は10 mあまりの河岸段丘上に立地する。川より50 mほど離れており、東西



番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	石鏃	サヌカイト	16.6	11	3	0.5	

番号	器種	部位	文様	調整(内面)	色調
2	深鉢	胴部	条痕文(縦)	ナデ(斜め)	にぶい褐

図2. 木頭村南宇オカダ(1)および上那賀町府殿(2)の遺物。

150 m, 南北80 m前後の範囲に遺物が分布する。

ここからはサヌカイト剥片2点, チャート剥片9点, 条痕文土器1点(図2-2)を採集した。条痕文土器は外面だけに条痕文が施され, 内面の調整はナデである。条痕文には不規則な部分もある。縄文土器と思われるが, その詳しい時期については不明である。

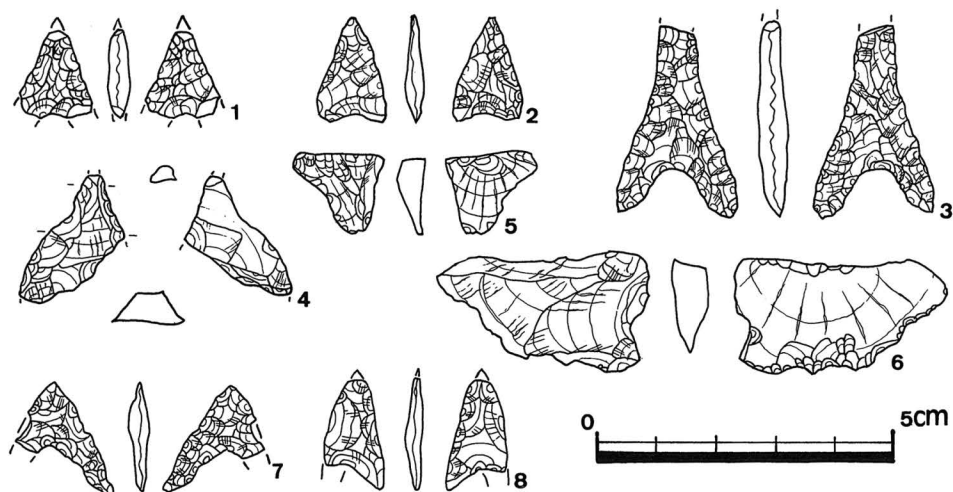
3. 相生町蔭谷北・南(図3, 22; 図版1) 那賀川の蛇行した流路が短絡した後, 上流側にはとやしき谷, 下流側には蔭谷川が流れている。蔭谷北は, とやしき谷が那賀川本流にそそぎ込む左岸の高い河岸段丘上に立地している。標高は160 m前後で, とやしき谷からは約50 m, 那賀川本流の河床からは約80 mの比高がある。とやしき谷からは100 m前後, 本流からは150 m前後離れており, 東西・南北ともに100 m足らずの範囲に遺物が分布している。今回調査した遺跡の中では, 河床からの比高が最も高い地点に立地している。

ここからはサヌカイト剥片7点, チャート剥片220点, 石鏃9点, 石錐1点, スクレイパー2点を採集した。剥片ではサヌカイトよりチャートの方が圧倒的に多いが, 製品では石鏃9点のうち5点にサヌカイトが使われており, チャートとサヌカイトがほぼ相半ばしている。チャート製の石鏃の中には長さが3 cmを越える大型のもの(図3-3)や厚みの強いもの(図版1-7)などもある。スクレイパーには姫島産と思われる黒曜石を使った小型のもの(図3-5)と, チャート製でノッチを持つもの(図3-6)とがある。

なお, 下流側の蔭谷川を遡って那賀川の旧河道と別れる付近, 松尾神社近くの蔭谷南でも遺物を採集した。蔭谷川左岸の河岸段丘上に立地し, 川から50 m足らず離れており, 南北100 m足らず, 東西150 m前後の範囲に遺物が分布する。北側には旧河道の痕跡があり, 南側の蔭谷川からの比高は30 mを越えている。

ここからはサヌカイト剥片14点, チャート剥片18点, 石鏃2点を採集した。石鏃はチャート製で抉りのひじょうに深いもの(図3-7)と, サヌカイト製で抉りのやや浅いもの(図3-8)とがある。

4. 相生町西納(図4, 23; 図版1, 2) 那賀川の支流, 紅葉川左岸で, 紅葉川沿いの道路と谷内, 平野方面からの道路の交わる地点の少し下流, 相名谷が紅葉川に流れ込んでいる地



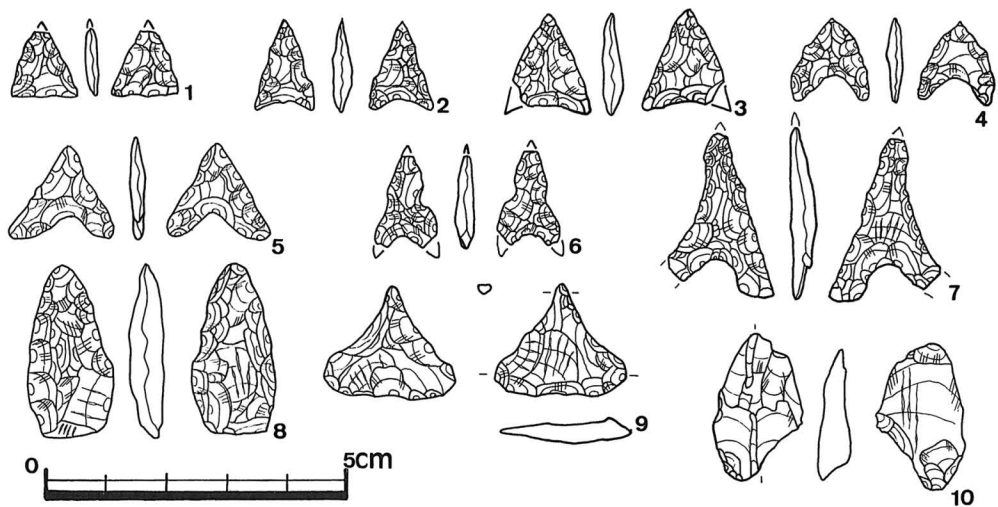
番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	石鏃	チャート	14.6	12.6	3.8	0.6	
2	石鏃	サヌカイト	17.6	11.8	3.1	0.5	
3	石鏃	チャート	32	20.3	4.8	2	
4	石錐	チャート	21.6	19.6	5.6	1.4	
5	スクレイパー	黒曜石	13.1	15.3	4.7	0.6	姫島産？
6	スクレイパー	チャート	20	35.7	2.9	3.9	
7	石鏃	チャート	18.6	16.9	3.2	0.5	
8	石鏃	サヌカイト	18.4	10.6	2.5	0.5	

図3. 相生町蔭谷北(1～6)および蔭谷南(7, 8)の石器。

点の両岸に立地する。標高は200 m前後で、紅葉川の河床からの比高は10 m程度、相名谷からは左岸で2～10 m、右岸で3～5 mである。東西200 m、南北100 mの範囲に遺物が分布する。

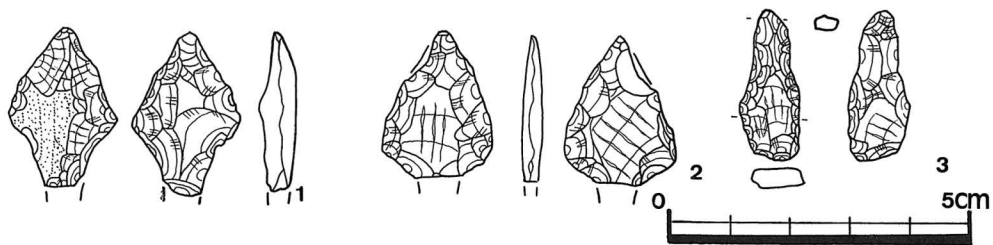
ここからはサヌカイト剥片326点、チャート剥片52点、黒曜石剥片1点、石鏃42点、石錐1点、スクレイパー1点、楔形石器2点を採集した。石鏃42点のうち36点がサヌカイト製で、剥片ばかりでなく製品についてもサヌカイトが多く使われている。黒曜石剥片は姫島産と思われる。石鏃の形態は凹基のものがほとんどで、このうちひじょうに深く抉られるものが2点ある(図4-4, 5)。凹基のほかに平基のものが2点ある(図4-1)。側縁は外湾するものが多いが、直線のもの3点(図4-2, 5)、中央付近に左右対称に抉れのあるもの1点(図4-6)もある。石錐は先端部から大きく広がって基部となっている。先端部と基部の境ははっきりとしない(図4-9)。楔形石器のうち1点は黒曜石の剥片を素材としており、2個1対の刃部を持つ(図4-10)。この黒曜石も姫島産と思われる。

5. 相生町大久保森原(図5, 24；図版2) 那賀川の旧河道の最も入り組んだ地点、現在の本流より700 mほど離れたところに立地している。標高は140 m前後で、西側の小さな沢からの比高は10 m足らずである。西側の沢から30 m足らず離れた地点、東西・南北とも100 m足らずの範囲に遺物が分布する。ここは、平坦ではなく、南の那賀川本流に向かって大



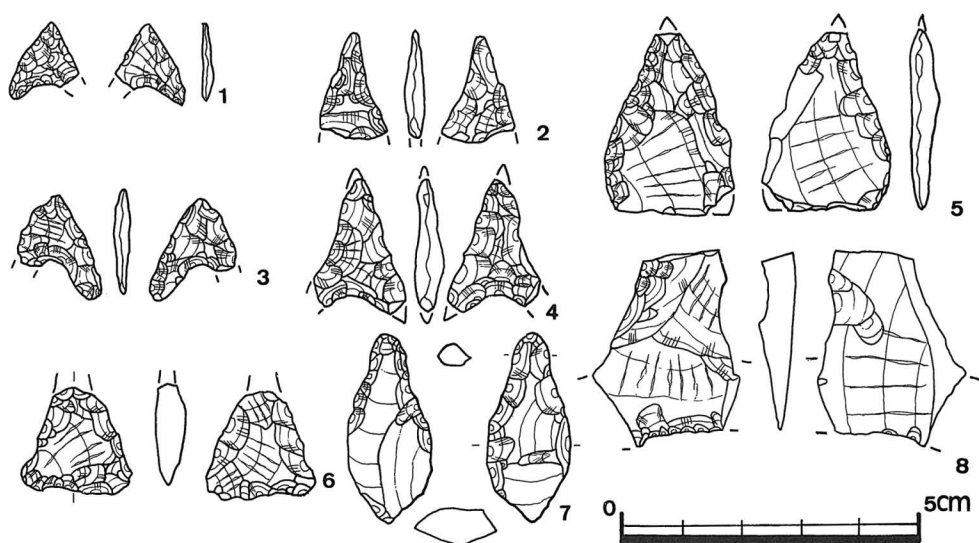
番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	石鏃	サヌカイト	11.3	11.3	2.3	0.3	
2	石鏃	チャート	14.8	10.9	2.9	0.4	
3	石鏃	サヌカイト	16.2	14.3	3.4	0.7	
4	石鏃	サヌカイト	13.8	13.4	2.6	0.3	
5	石鏃	サヌカイト	15.9	17.4	2.4	0.5	
6	石鏃	サヌカイト	15.6	11	3.3	0.4	
7	石鏃	サヌカイト	27.7	18.1	4.3	1.2	
8	石鏃	サヌカイト	28.5	14	5.2	2.3	
9	石錐	サヌカイト	18.4	22	4.2	1.3	
10	楔形石器	黒曜石	24.8	14.9	5.4	1.4	姫島産？

図4. 相生町西納の石器。



番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	石鏃	サヌカイト	26.7	17.8	6.1	2.1	
2	石鏃	サヌカイト	24.5	18.8	3.5	1.6	
3	石錐	サヌカイト	25	1.3	4.5	1.2	

図5. 相生町大久保の石器。



番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	採集地
1	石鏃	サヌカイト	13.3	11.8	2	0.2	上寺野
2	石鏃	サヌカイト	17.9	12	3.4	0.6	野田
3	石鏃	サヌカイト	17.1	14.7	2.5	0.5	野田
4	石鏃	サヌカイト	22	16	4.3	1.2	野田
5	石鏃	サヌカイト	30.2	21.5	4.1	2.7	上寺野
6	石錐	サヌカイト	18	19.6	5.3	1.8	阿地屋
7	石錐	珪質頁岩	31.6	14.1	5.9	2.5	原尻
8	石匙?	珪質頁岩	33.5	24.4	6	4.4	川又

図6. 日和佐町赤松の石器。

きく傾斜して本流からの比高は80 mほどある。

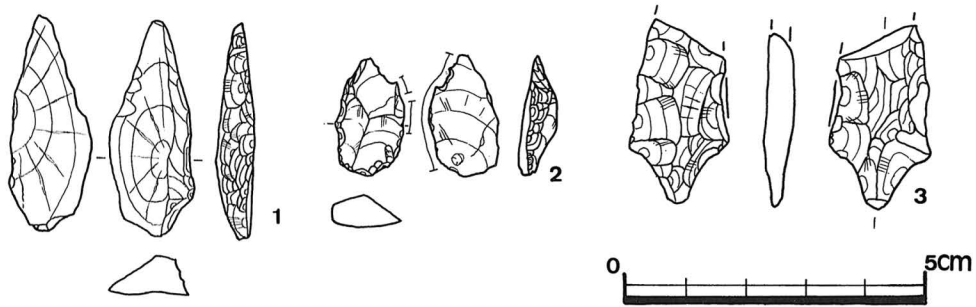
ここからはサヌカイト剥片248点，チャート剥片43点，石鏃5点，石錐1点を採集した。剥片のほとんどはサヌカイトで，チャートの剥片には長さ2 cm以下の小さなものが多い。石鏃，石錐ともにすべてがサヌカイトでつくられている。また，石鏃5点のうち全体の形がわかる2点は柄を持っている(図5-1,2)。石錐は先端部と基部の区別がはっきりとしている(図5-3)。

6. 海部郡日和佐町赤松(図6,25；図版2) 赤松川の流域では，上流から川又，原尻，上寺野，野田，高瀬の5ヶ所で遺物を採集した。

川又は杉山谷と天狗谷が合流する地点のやや下流左岸の50 mほど離れた河岸段丘上に立地する。標高は190 m前後で，河床からの比高は20 m足らずである。

ここからはチャート剥片2点，珪質頁岩の剥片1点，珪質頁岩製の石匙と思われる石器(図6-8)1点を採集した。石匙と思われる石器は破損しており，つまみのつくりだしが不十分であるが，横型であったと思われる。

原尻は川又の下流2 kmほどの赤松川右岸の河岸段丘上に立地する。標高は150 mあまり，



番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	ナイフ形石器	サヌカイト	35.5	14	6.2	2.8	国府型
2	ナイフ形石器	チャート	19.9	11.7	5.5	1.1	縦長剥片素材
3	石鎌	サヌカイト	31.1	17.3	4.7	2.5	

図7. 相生町延野大原の石器。

河床からの比高は5 m足らずである。

ここからはチャート剥片1点、珪質頁岩製の石錐1点を採集している。石錐は基部の方が幅が広いが先端部と基部の境ははっきりとしない(図6-7)。

上寺野は赤松川の支流である寺野川の左岸および右岸に立地する。500 mほど離れた地点で同一の遺跡かどうかははっきりとしない。ともに標高170 m前後、河床からの比高は3 m足らずである。

ここからはサヌカイト剥片2点、チャート剥片2点、サヌカイト製の石鎌2点、弥生土器片1点を採集した。石鎌には凹基のもの(図6-1)と平基のもの(図6-5)がある。弥生土器は後期のものである。

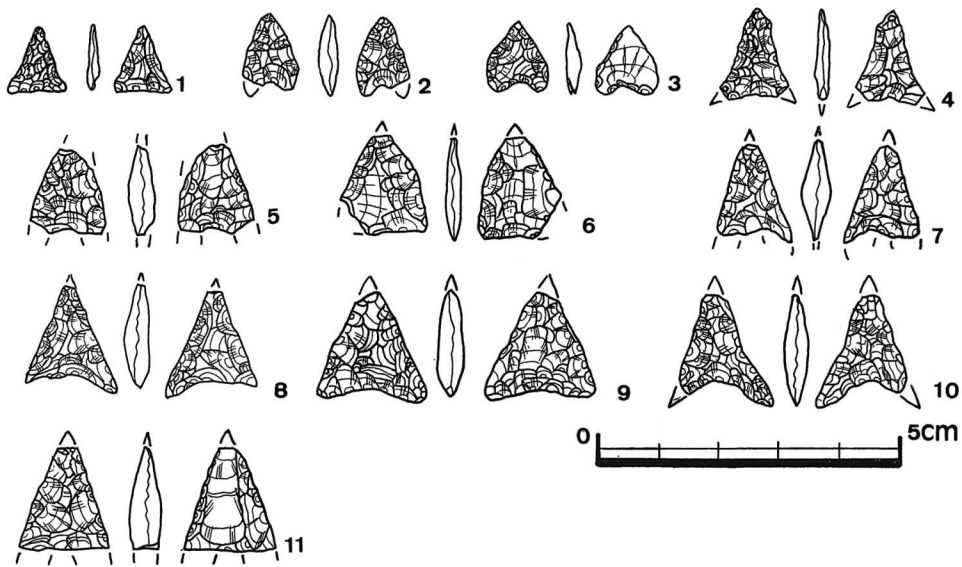
野田は寺野川と耳瀬から流れる小河川に挟まれた、赤松川右岸の低い河岸段丘上に立地する。標高140 m程度、河床からの比高は3 m～10 mほどである。東西200 m、南北300 mの範囲に遺物が分布する。これは阿地屋にまで及ぶ。

赤松川流域の中では野田の採集遺物が最も多い。ここからはサヌカイト剥片117点、チャート剥片46点、石鎌5点(図6-2～4)、石錐(図6-6)1点、楔形石器1点、スクレイパー2点を採集した。剥片にはサヌカイトが多く、製品もすべてサヌカイト製である。石鎌は凹基のものが多く、抉りの深いものも1点ある。石錐は先端部と基部がはっきりと区別されるタイプのもので、先端部は破損している。

高瀬は野田の下流1.5 kmほどの赤松川右岸に立地する。標高110 m前後で河床からの比高は5 m前後である。サヌカイト剥片2点、チャート剥片2点を採集した。

7. 相生町延野大原(図7, 26; 図版3) 那賀川の流路が短絡し、残された河川跡の上流側に流れる小河川の右岸で、本流の左岸の河岸段丘上に立地する。標高90～100 m、小河川の河床からの比高は15 m以上、那賀川本流からの比高は50 mを越えるものと思われる。本流より100 mほど離れており、遺物は東西350 m、南北200 mの範囲に分布する。

ここからはサヌカイト剥片99点、チャート剥片18点、ナイフ形石器2点、石鎌13点、石錐1点を採集した。ナイフ形石器の内1点がチャート製で、ほかはすべてサヌカイト製であ

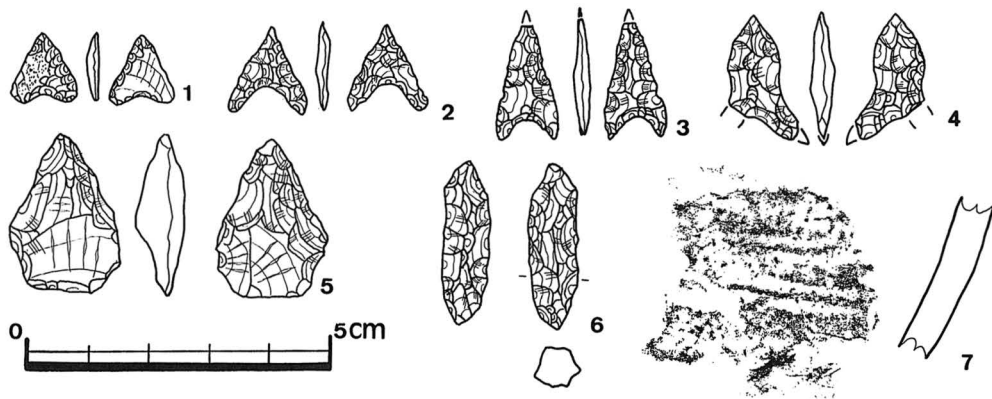


番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	石鏃	サヌカイト	11.1	9.8	1.7	0.1	
2	石鏃	チャート	13.2	9.6	2.9	0.3	
3	石鏃	サヌカイト	11.8	10.8	2.4	0.3	
4	石鏃	サヌカイト	15.1	11.7	2.7	0.3	
5	石鏃	チャート	14.4	12.6	4.3	0.8	
6	石鏃	サヌカイト	16.8	14.2	2.6	0.6	
7	石鏃	黒曜石?	16.4	12.4	4.8	0.6	
8	石鏃	サヌカイト	17.7	15.2	4.2	0.8	
9	石鏃	チャート	17.7	18.8	4.6	1.3	
10	石鏃	チャート	18.8	15.2	3.9	0.7	
11	石鏃	チャート	17.3	15.2	5	1.2	

図8. 相生町谷内Aの石器.

る。ナイフ形石器(図7-1)は、瀬戸内技法によってつくられた国府型ナイフ形石器である。盤状剥片から最初に剥離された翼状剥片を素材として用いており、翼状剥片を剥離する際の打点が板状剥片の打点からずれている。長さ3.5 cmあまりと小型で、典型的な翼状剥片ではない。一側縁全部と他方の側縁の一部に背面側より背部加工を加えている。背面は盤状剥片からの剥離面で、翼状剥片を剥離するときの打面との前後関係は背部加工によって確認できなくなっている。もう1点のナイフ形石器(図7-2)は縦長剥片を素材とし、長さ2 cm足らずの小型のものである。一側縁には急角度にブランディングが施され、先端近くには槌状剥離が見られる。反対側の側縁には浅い角度の剥離と微細な剥離痕が見られる。石鏃のうち3点だけ基部の形態がわかり、2点が凹基、1点が柄を持つ(図7-3)。

8. 相生町谷内A(図8, 26; 図版3) 谷内川の左岸の河岸段丘上に立地する。標高100 m前後、河床からの比高は5m前後である。遺物は東西・南北とも約100 mの範囲に分布する。



番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	石鏃	サヌカイト	11.2	10.9	1.7	0.2	
2	石鏃	サヌカイト	14.1	13	1.8	0.2	
3	石鏃	サヌカイト	18.9	10.4	2.6	0.3	
4	石鏃	サヌカイト	20.5	13	3.8	0.6	
5	石鏃	サヌカイト	26.1	17.9	8	2.7	
6	石錐	サヌカイト	27	8.6	6.5	1.6	

番号	器種	部位	文様	調整（内面）	色調
7	深鉢	胴部	条痕文（斜め）	ナデ（斜め）	にぶい黄橙

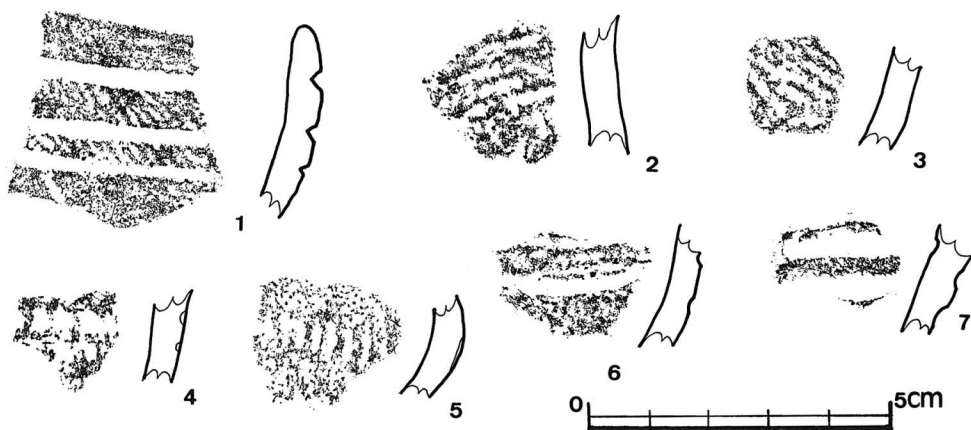
図9. 相生町谷内Bの遺物。

ここからは、サヌカイト剥片90点、チャート剥片1371点、石鏃26点、スクレイパー14点、楔形石器2点を採集した。石鏃26点の材質は、サヌカイト17点、チャート8点、黒曜石1点である。この黒曜石の産地は不明である。石鏃の形態を見ると、三角形のものが1点ある（図8-1）ほかは凹基のことが多い。このうち側縁が外湾するもの（図8-2, 3, 5, 6, 9, 11）、側縁に屈曲点を持ち五角形状を呈するもの（図8-4）、直線のもの（図8-7, 8）、内湾気味のもの（図8-11）などがある。

9. 相生町谷内B（図9, 26；図版3） 谷内Aのやや下流、対岸の河岸段丘上に立地する。標高100 m前後、河床からの比高は5 m足らずである。遺物は東西30 m、南北80mの狭い範囲に分布する。

ここからは縄文土器片2点、サヌカイト剥片288点、チャート剥片316点、石鏃39点、石錐1点を採集した。縄文土器は胴部破片で、一つは条痕文（図9-7）、もう一つは無文である。石鏃39点のうち34点がサヌカイト製で、石鏃の石材についてもサヌカイトの割合が高い。石鏃の基部の形態は32点が凹基（図9-1～4）、2点が平基である（図9-5）。凹基のものには側縁の外湾するもの、直線のもの（図9-1～3）、外湾の後に内湾するもの（図9-4）とがある。長さが1.5 cm未満の小型のことが多い。石錐はサヌカイト製で棒状である（図9-6）。

10. 相生町鮎川西ノ宮（図10～15, 26；図版3～6） 那賀川の支流である谷内川と、旧河



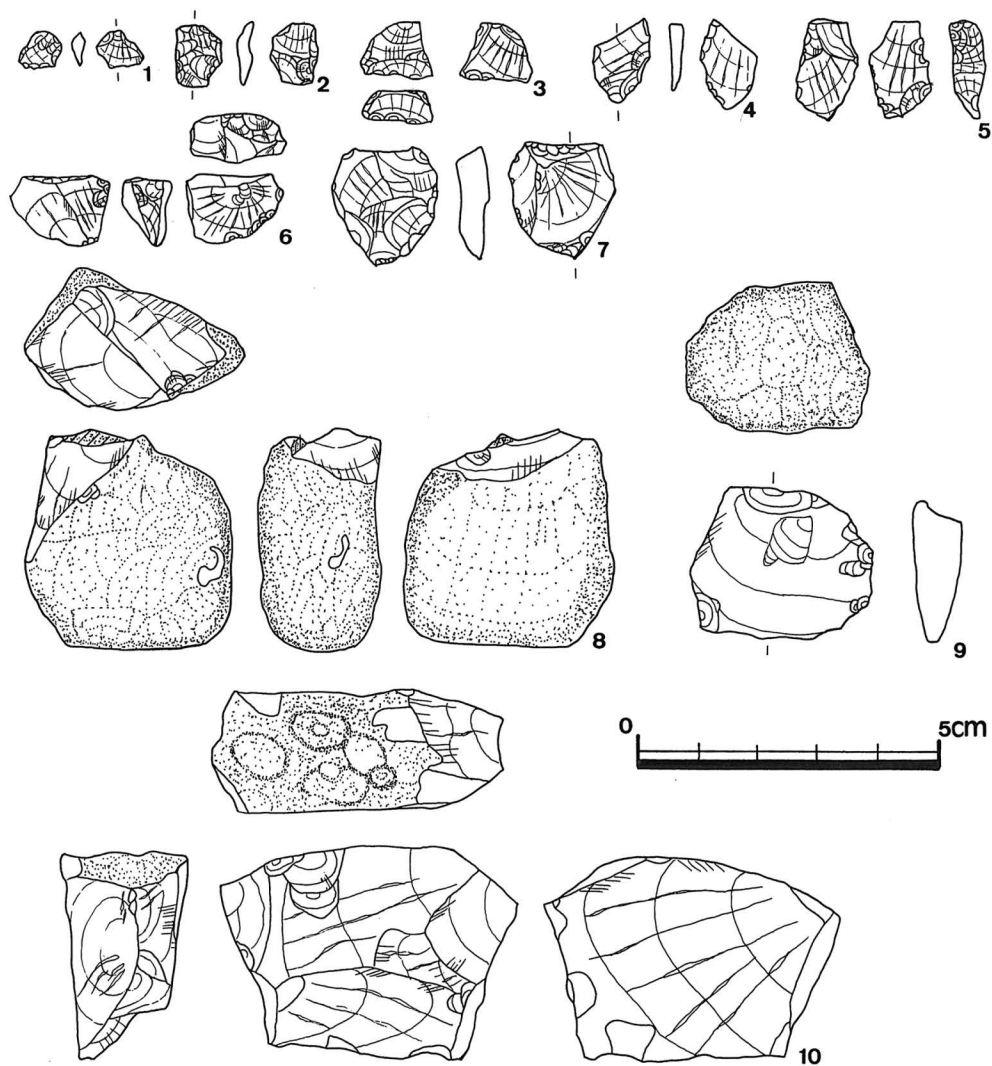
番号	器種	部位	文様	調整（内面）	色調
1	深鉢	口縁部	縄文（RL）→ 沈線3条 すり消し	ナデ→ミガキ	灰黄
2	深鉢	口縁部付近	縄文（LR）→	ナデ	にぶい褐
3	深鉢	胴部	縄文（RL）	ナデ	にぶい橙
4	深鉢	胴部	爪形押し引き	ナデ→ミガキ	にぶい黄橙
5	深鉢	胴部	爪形	ナデ	にぶい黄橙
6	不明	胴部	沈線	ナデ	にぶい褐
7	深鉢	口縁部付近	沈線2条	ナデ 沈線	黒

図10. 相生町鮎川西ノ宮の縄文土器。

道を流れる小河川に挟まれ、河岸段丘上に立地している。標高100 m前後、谷内川の河床からの比高は10 m足らずで、小河川の河床からの比高は6 m余りある。谷内川と小河川の河床から3 m余りの比高で平坦面が続いた後、4 m余りの段丘崖を経て、また平坦面が続く。遺物は谷内川から20 mほど離れた地点に分布し、東西150 m、南北150 mの範囲に広がる。崖の上に濃密に分布するが、崖の下でも採集できる。崖の上はやや傾斜しており、3 mを越える高低差がある。

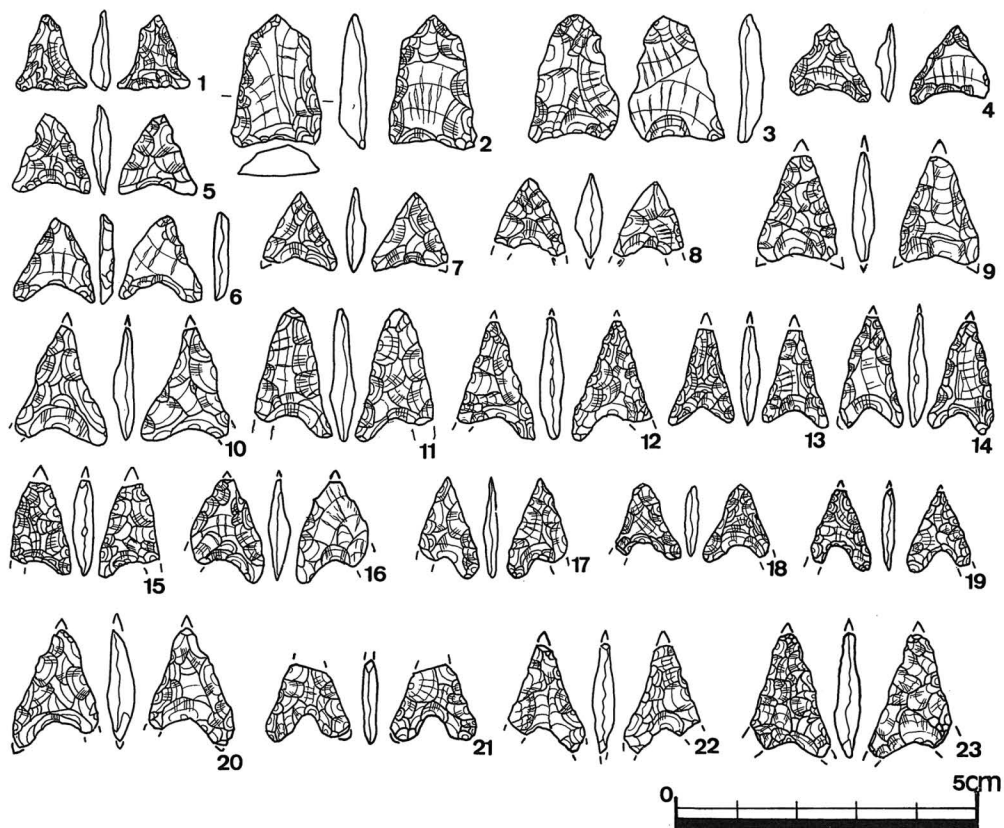
ここからは非常に大量の遺物を採集しており、縄文土器片9点、サヌカイト剥片・石核6286点、チャート剥片・石核2850点、黒曜石の剥片9点、珪質頁岩の剥片1点、石鏃566点、石錐27点、石匙1点、スクレイパー74点、楔形石器25点、切断調整石器3点、石錘1点、磨石1点を数える。

縄文土器片は、破片が小さいため詳しい特徴はわからないが、縄文だけのもの（図10-2, 3）や無文のものほかに、すり消し縄文を持つもの（図10-1）、連続して爪形文の施されるもの（図10-4, 5）、2条の沈線文を持つもの（図10-6, 7）などがある。すり消し縄文の土器は口縁部の破片で、口縁は波状を呈し、口唇はやや薄くなっている。横位にRL縄文をこがした後に、先端の尖った工具で断面V字形の沈線を3条引き、口縁端部と最下段の沈線の下部をすり消している。これは縄文時代後期前半のものと考えられる。爪形文の土器のうち1点（図10-4）は、半裁竹管状の工具を用いて2 mmほど押し引いた後、1 mmほど間隔をあけ連続的に施文している。押し引きは少なくとも3条確認できる。地文は不明である。この破



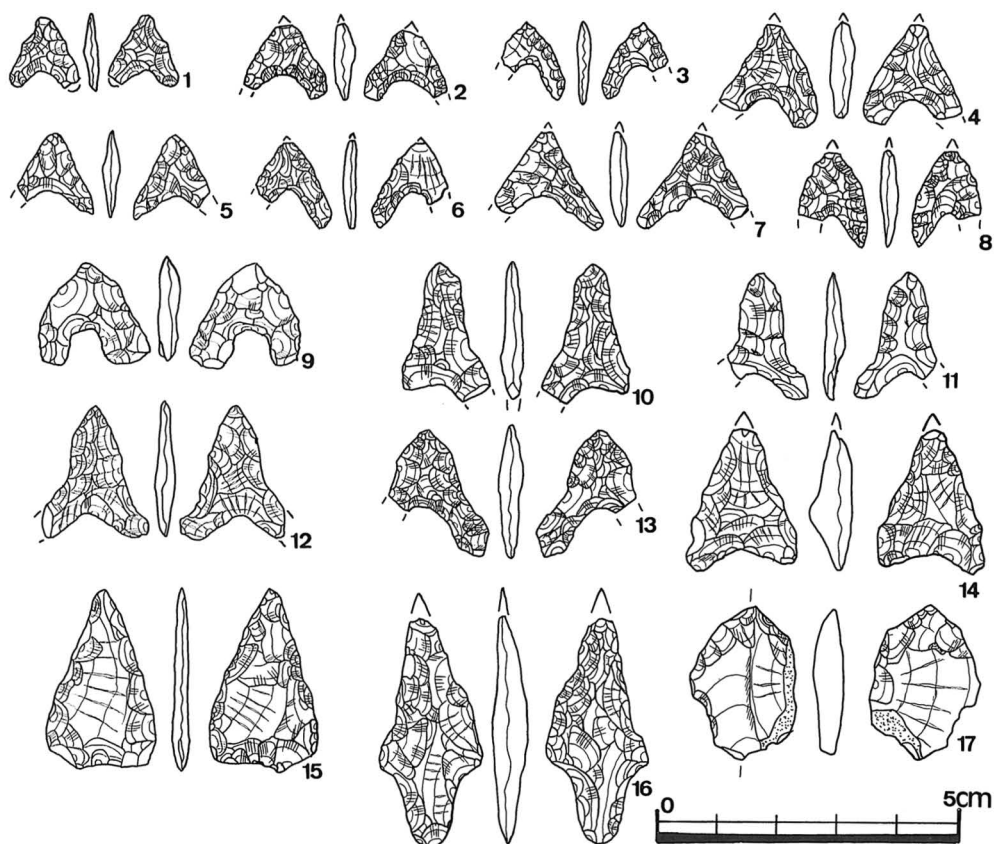
番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	剥片	黒曜石	7.7	5.4	2.5	0.1	姫島産?
2	剥片	黒曜石	10.8	8.2	3	0.3	姫島産?
3	剥片	黒曜石	11.7	9.9	5.4	0.5	姫島産?
4	剥片	黒曜石	14.2	9.5	2.6	0.3	姫島産? 白濁強
5	剥片	黒曜石	11.4	16.1	8.4	1.4	姫島産?
6	剥片	黒曜石	18	20.3	5.2	1.7	姫島産?
7	剥片	黒曜石	10.6	16	5.5	0.8	姫島産?
8	石核	チャート	35	36.9	20.6	34	
9	剥片	チャート	25.2	30.5	9.4	7.6	
10	剥片	サヌカイト	49.8	36.7	20.7	43.5	

図11. 相生町鮎川西ノ宮の剥片・石核.



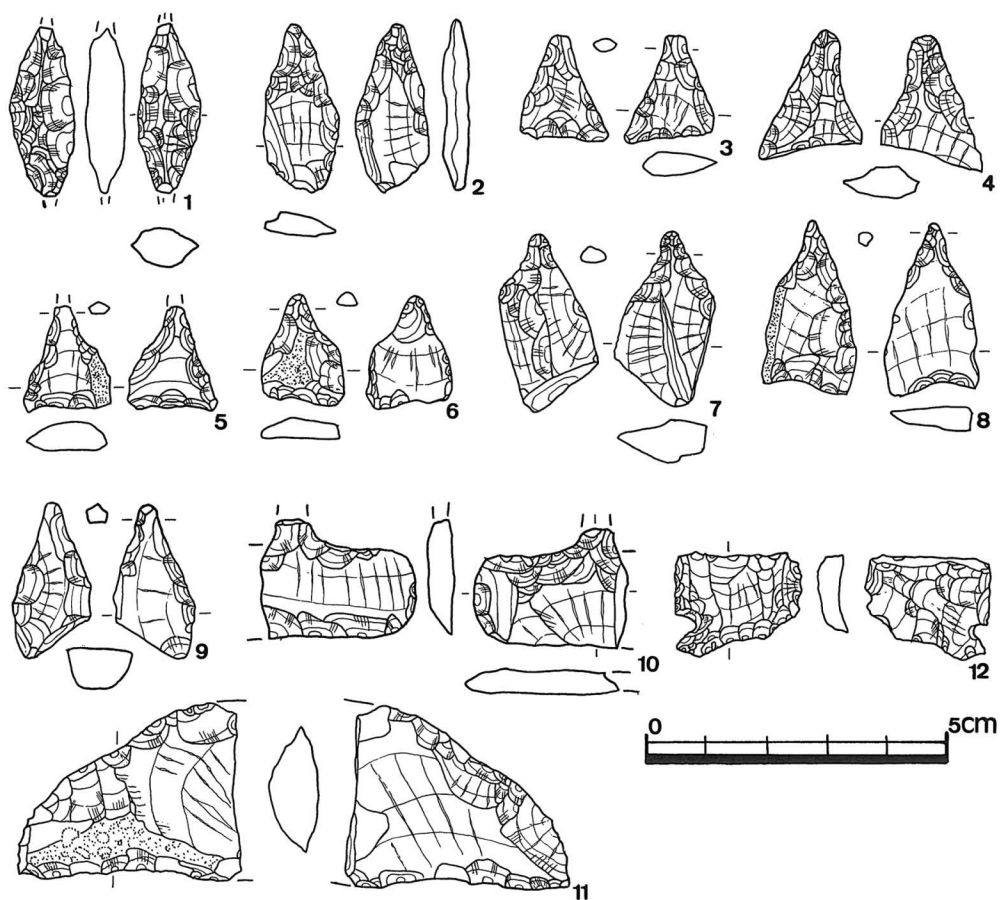
番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	石鏃	サヌカイト	2.7	11.9	3.3	0.3	
2	石鏃	サヌカイト	21.6	14.7	4.8	1.5	
3	石鏃	チャート	21	15.6	3.4	1.1	
4	石鏃	サヌカイト	13.3	13.4	3	0.4	
5	石鏃	サヌカイト	13	13	3.2	0.4	
6	石鏃	サヌカイト	14.2	13.4	2.3	0.5	
7	石鏃	サヌカイト	13	12.6	3.3	0.4	
8	石鏃	サヌカイト	12.5	11.8	3.6	0.4	
9	石鏃	サヌカイト	17.6	13.5	3.6	0.7	
10	石鏃	サヌカイト	19.1	15.1	4	0.3	
11	石鏃	サヌカイト	22	12.8	3.4	0.7	
12	石鏃	珪質頁岩	19.9	12.9	3.7	0.7	
13	石鏃	サヌカイト	15.8	10.8	3	0.3	
14	石鏃	サヌカイト	18.4	11.1	2.9	0.5	
15	石鏃	チャート	15.3	10	3.5	0.5	
16	石鏃	サヌカイト	17.2	12.2	3.6	0.6	
17	石鏃	サヌカイト	16.6	10.1	2.4	0.3	
18	石鏃	サヌカイト	13	10.8	1.9	0.2	
19	石鏃	サヌカイト	13.8	10.3	1.8	0.2	
20	石鏃	サヌカイト	19.5	14.3	4.8	0.9	
21	石鏃	サヌカイト	12.9	14	2.1	0.3	
22	石鏃	チャート	17.3	12.9	4.1	0.6	
23	石鏃	チャート	20.2	13.7	4	0.9	

図12. 相生町鮎川西ノ宮の石鏃, その1.



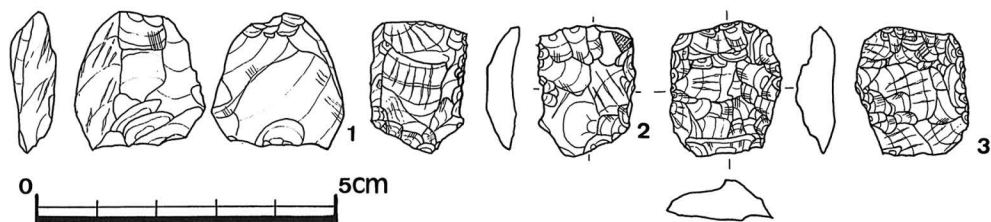
番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	石鏃	サヌカイト	11.8	11.6	2.1	2	
2	石鏃	チャート	12	14.1	3.1	0.4	
3	石鏃	サヌカイト	12	10.5	1.8	0.2	
4	石鏃	サヌカイト	17	17.7	3.8	0.8	
5	石鏃	サヌカイト	13.5	12.9	2.5	0.3	
6	石鏃	サヌカイト	14.9	12.6	2	0.3	
7	石鏃	サヌカイト	16.7	18.1	3	0.6	
8	石鏃	チャート	15.7	11.3	2.6	0.4	
9	石鏃	サヌカイト	17.2	18.6	3.7	1	
10	石鏃	サヌカイト	23.2	14.6	3.7	0.8	
11	石鏃	サヌカイト	28	21	8.2	4.3	
12	石鏃	サヌカイト	21.8	17.9	3.2	0.8	
13	石鏃	サヌカイト	21	16.2	3.8	0.8	
14	石鏃	サヌカイト	23	18.3	6.8	2.1	
15	石鏃	サヌカイト	30	13.2	3	1.6	
16	石鏃	サヌカイト	37.6(24	17	5.8	2.7	
17	石鏃未製品	サヌカイト	25.3	17.8	5.5	2.6	

図13. 相生町鮎川西ノ宮の石鏃, その2.



番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	石錐	サヌカイト	27	11.1	6.2	1.9	
2	石錐	サヌカイト	28	12.8	4.3	1.6	
3	石錐	サヌカイト	22.3	16.7	4.9	1.3	
4	石錐	サヌカイト	17.7	14.8	3.5	0.9	
5	石錐	サヌカイト	17.8	15	4.3	0.9	
6	石錐	サヌカイト	18.4	14.1	3.5	0.9	
7	石錐	サヌカイト	29.3	14.1	8.6	2.9	
8	石錐	サヌカイト	28.5	16	4.3	1.9	
9	石錐	サヌカイト	25.6	12.9	6.2	1.9	
10	石匙	サヌカイト	20	25.5	3.9	2.6	
11	スクレイパー	サヌカイト	37.2	29.9	7.7	9.4	
12	スクレイパー	チャート	20.4	16.8	6.9	2.1	

図14. 相生町鮎川西ノ宮の石錐・石匙・スクレイパー。



番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	楔形石器	サヌカイト	23.5	21.4	6.7	3.8	刃部一対
2	楔形石器	チャート	21.2	15.7	4.5	2.2	刃部二対
3	楔形石器	チャート	22.4	18.4	6.6	2.6	刃部二対

図15. 相生町鮎川西ノ宮の楔形石器。

片は小さく、時期を特定できない。ほかの破片の詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期または晩期のものと思われる。

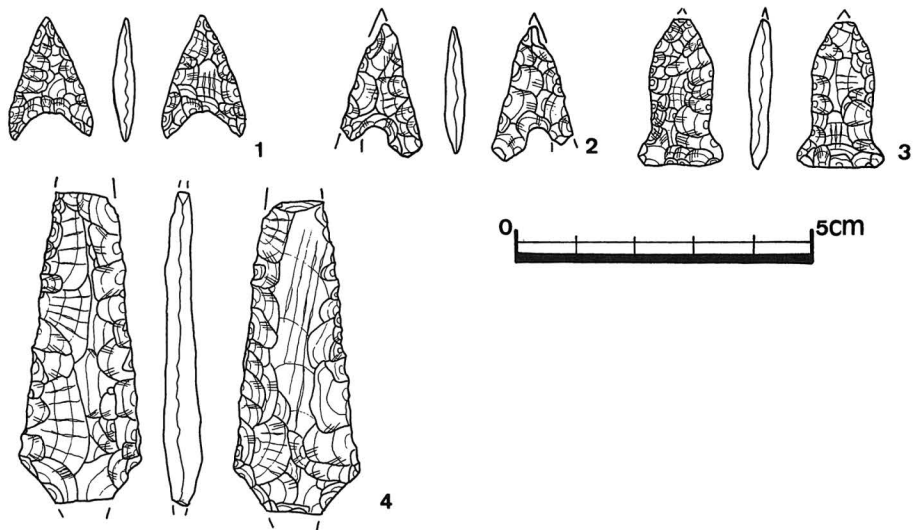
サヌカイトの剥片は6000点以上採集されているが、最大で長さ4 cm程度である。5 mm以下の碎片も多い。白く風化した自然面を持つものは少なく、原石の大きさを復元できるような剥片は採集されていない。自然面を持ち厚さが2 cmを越える盤状の剥片がある(図11-10)が、剥離が進んでおり破損もしているので、これも本来の大きさはわかりにくい。一方、チャートは長さ5 cmほどの細長い円礫を原石としているものもあり(図11-8)、剥片には厚さが1 cm近くある分厚いものも見られる(図11-9)。珪質頁岩の製品は少なく、剥片もあまり発見されていない。

黒曜石の剥片(図11-1～7)には、白濁の強いもの(図11-4)、透明感のあるもの(図11-6)などがある。これらは大分県の清水氏と高知県の木村氏によって肉眼で同定していただき、すべて姫島産とのご教示をいただいた。大きいものでも長さ2 cm足らずである。縁辺には微細な剥離痕を認めるが、意識的な加工の痕跡ははっきりとしない。ただし、図11-1～3は製品を作るための目的剥片ではなく、剥片に刃部加工を施したときに生じたものである。ここでは姫島産黒曜石を石材とした石鏃・石錐などの製品は発見されていないが、原石あるいは半製品を搬入し、ここで石器製作を行っていたことがわかる。

石鏃の石材は566点のうち527点がサヌカイト、37点がチャート、1点が珪質頁岩製で、圧倒的にサヌカイトが多い。形態については、凹基のものが大部分を占めるが、中には平基のものや柄を持つもの(図13-16)も採集されている。平基のものの全体的な形は、三角形(図12-3)や五角形(図12-1, 2)である。凹基の石鏃には、脚が本体と一体となって、挟りの浅いもの(図12-4～23)、深いもの(図13-1～9)や本体と脚の間に変曲点があり、細長い三角形、五角形(図13-10～13)や紡錘形に脚のつくものなどがある。未製品と思われるもの(図13-17)も採集している。

石錐の石材もサヌカイトが多い。形態は基部と先端部のはっきりと別れたもの(図14-3～9)が多いが、中ふくらみの棒状のもの(図14-1)、先端部から基部へと徐々に広がるもの(図14-2)もある。

石匙・スクレイパーでは77点中51点と7割程度にチャートが使われており、他の器種とは



番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	採集地
1	石鏃	チャート	20.8	14.3	3.2	0.7	相生町築ノ上
2	石鏃	サヌカイト	22.6	14.2	3.3	0.7	相生町築ノ上
3	石鏃	チャート	24.8	14.6	3.7	1.2	鷺敷町阿井
4	石鏃	サヌカイト	52.4	20.8	6.4	6.4	鷺敷町阿井

図16. 相生町築ノ上(1, 2)および鷺敷町阿井(3, 4)の石鏃。

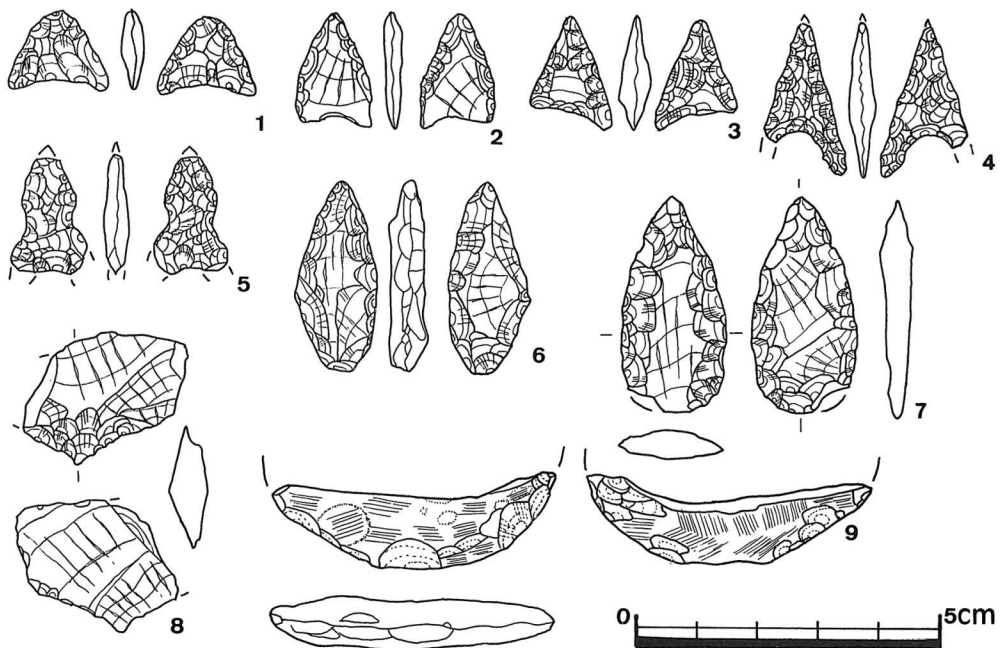
対照的である。石匙(図14-10)はつまみ部分の作り出しがはっきりとしない。スクレイパーとしたものは2点図示した。図14-11は背面に自然面を残す盤状の剥片を素材とし、鏃状の形に仕上げている。刃部は内湾している。図14-12は楔形石器を素材とし、一側縁に刃部を作り出し、その隣の辺に抉りを入れ、ここもまた刃部としている。

楔形石器もサヌカイトが多く使われている。1対の刃部を持つもの(図15-1)が多い。裁断面をもつものもある。

11. 相生町築ノ上(図16, 26; 図版7) 那賀川本流右岸で、鮎川や延野の対岸の広い河岸段丘上に立地している。標高60～70 m, 那賀川本流の河床からの比高は20 m足らずである。遺物は、西法寺という寺があったといわれている川沿いの地点を中心として、東西450 m南北250 mの広い範囲に分布している。

ここからはサヌカイト剥片13点、チャート剥片222点、石鏃4点、楔形石器1点、スクレイパー1点を採集した。剥片の石材としてはチャートが多く、また、石鏃も4点のうち3点がチャート製である。石鏃の基部の形態がわかるものは、2点が凹基で、1点は平基である。凹基の側縁は外湾するもの(図16-1)と直線のもの(図16-2)とがある。楔形石器、スクレイパーともにチャート製である。

12. 鷺敷町阿井(図16, 27; 図版7) 那賀川本流沿い左岸で、本流から100 m前後離れた河岸段丘上に立地する。標高60～80 m, 河床からの比高は10～30 mである。段丘面はかなり傾斜している。遺物は東西700 m, 南北350 mの範囲に分布する。



番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	石鏃	サヌカイト	13	16.4	3	0.6	
2	石鏃	サヌカイト	19.4	12.6	2.7	0.6	
3	石鏃	サヌカイト	18.8	13.9	4.8	0.7	
4	石鏃	サヌカイト	25	14.2	4.2	0.8	
5	石鏃	チャート	19.2	12.6	3.8	0.8	
6	石鏃	サヌカイト	31.4	14.1	5.8	3	
7	石鏃	サヌカイト	35.9	17	4.4	1.2	
8	石 錐	サヌカイト	20.3	29.1	6.9	3.1	
9	石 斧	砂岩	14.1	46.7	7.8	5.1	

図17. 阿南市新野町廿枝の石器。

ここからはサヌカイト剥片13点、チャート剥片153点、石鏃5点、スクレイパー3点を採集した。石材は、剥片では圧倒的にチャートが多いが、製品ではややチャートが多い程度である。石鏃のうち全体の形のわかるものは2点ある。1点は大型で柄を持ち、側縁が直線的で縁辺からの剥離がほとんど中心線付近で止まっている。片面は基部を除けば側縁だけ加工しており、素材の剥離面を残している(図16-4)。もう1点は幅広の外湾する本体の基部から両横に短く脚が伸びている(図16-3)。本体の形は五角形に近い。

13. 阿南市新野町廿枝(図17, 28; 図版7) JR新野駅南南東約400 m付近の段丘上にある。この段丘は福井から新野駅方向へ流れていた古廿枝川右岸の河岸段丘である。現在の福井川は河川の争奪によって桑野川には合流せず、直接橋湾に流れ込んでいる。河川跡のほぼ中央を現在の廿枝川が流れている。遺物の分布地点は、廿枝川からは50 mほど離れており、比高は5 mほどである。遺物は東西30 m, 南北20 mの狭い範囲に分布している。

ここからはサヌカイト剥片55点、チャート剥片487点、石鏃10点、石錐1点、磨製石斧1点を採集した。剥片ではサヌカイトよりチャートが多いが、製品にはサヌカイトが多く使われている。石鏃10点中7点がサヌカイトである。石鏃には凹基のものと凸基(図17-6)、円基(図17-7)のものとがある。凹基のものは、縁辺の外湾するもの(図17-1~3)、直線的なもの(図17-4)、中央付近に左右対称に抉れを持つもの(図17-5)などがある。磨製石斧は、那賀川流域の調査でこの1点だけしか採集していない。砂岩製と思われ、刃部のみの破片である(図17-9)。

考察

遺物を採集した34カ所のうちで、遺跡の時期がほぼ特定できるのは4地点である。ナイフ形石器や縄文土器・弥生土器の特徴から、相生町延野大原は後期旧石器時代、上那賀町府殿は縄文時代、相生町谷内Bと相生町鮎川西ノ宮は縄文時代後期、日和佐町赤松上寺野は弥生時代後期となる。他の地点では土器はまったく採集できず、石鏃をはじめとする石器を採集している。石鏃では縄文時代と弥生時代の区別が明確にはならず、石鏃を時代の推定材料とはしがたい。また、ナイフ形石器や縄文土器によってある程度時期が特定できた地点でも、他の時期のものが入り込んでいる可能性もある。このように表面採集資料という限界はあるものの、各地点の立地と性格について、また、相生町延野大原のナイフ形石器、鮎川をはじめとする各地点の石鏃の形態、サヌカイト、チャート、黒曜石など石器の石材の搬入などの問題は重要であるので、それらの遺物について若干の考察を行うこととする。

遺跡の立地と性格 今回発見した34カ所の遺跡のうち、阿南市椿町の蒲生田を除いては、すべて河川のそばに立地している。中には木頭村南宇オカダや鷺敷町阿井のように、那賀川本流沿いの河岸段丘上に立地するものもあるが、ほとんどの遺跡が支流沿いやさらにその分流域に立地しており、本流近くに立地する遺跡でも相生町蔭谷北や相生町延野大原のように支流との合流点近くのものが多い。

これらの支流の中には、もともとの本流の流路が短絡してその跡を流れているものもある。支流の近くととらえるほかに、旧河川に臨む河岸段丘上や旧河道の跡そのものを選んで立地している遺跡があるという視点でも考える必要があろう。

河川からの距離について見ると、相生町蔭谷北では河川から100 m以上も離れてはいるが、他の地点のものでは50 mを越えるものがなく、中には10m未満のところもある。また、河床からの比高では、相生町蔭谷北と相生町延野大原のように、蛇行の基部が短絡した旧河道の上流側に立地する遺跡では、那賀川本流の河床からの比高が50 mを越え100 mに近いところもあるが、他の遺跡では、10 m足らずのところが多い。水の利用を強く意識した立地であると考えられる。

調査はまだ十分とは言えず、時期が不明なものが多い。しかし、紅葉川流域、赤松川流域、谷内川流域では、ある程度、遺跡をまとめりとしてとらえることができる。これらのうち紅葉川流域の西納、赤松川流域の赤松野田、谷内川流域の鮎川西ノ宮は、それぞれの流域の中心的な遺跡と考えられる。特に鮎川西ノ宮は、採集した遺物の量も豊富であるので、時期的にも長い間続いたものであり、那賀川流域全体の中心的な遺跡であったと考え

られる。今採集している資料の量から言うと、鮎川西ノ宮だけが定住のための遺跡で、ほかの遺跡は季節的な移動によるキャンプサイトのような性格であったと考えられる。

ただし赤松川の流域については、紅葉川・谷内川流域とは隔絶されているので、赤松野田あたりが定住域となっていた可能性が高い。

また、鮎川西ノ宮で採集した遺物のほとんどは、剥片や石核類と石鏃・石錐などの打製の剥片石器類ばかりである。磨製石斧は1点も採集されておらず、石錘、磨石はそれぞれ1点づつしか採集されていない。また、石鏃の中には失敗品(図13-10)や未製品(図13-17)と思われるものも存在し、剥離の進んだ、自然面を持つ厚手のサヌカイトの剥片もある。

これらのことから、サヌカイトは大きな盤状の剥片としてこの遺跡に持ち込まれ、これを石核として剥片を剥離し加工を行っていた可能性が高い。鮎川西ノ宮では、石鏃・石錐などの剥片石器類の製作が行われていたのではないかと考えられる。石器の製作には、サヌカイト、チャートばかりでなく姫島産と思われる黒曜石も使われていたようである。

生業としては、石鏃が卓越していることから考えて、狩猟がさかんに行われていたと判断できる。川が近くにありながら、今のところ石錘がほとんど採集されていないことから、網漁などはあまりおこなわれていなかったのかもしれない。他の地点についても、石鏃が多く採集されており、鮎川西ノ宮と同じように狩猟がさかんに行われていたという可能性が高い。

ナイフ形石器の系譜 県南では廿枝遺跡でナイフ形石器が発見されている(天羽・立花, 1969)。これは酸性凝灰岩製の大型のナイフ形石器とチャート製の小型のナイフ形石器である。大型のものは発見当初、鎌木・高橋(1965)による瀬戸内編年に照らして、国府型ナイフ形石器か、宮田山型のナイフ形石器にあてられたが(天羽・立花, 1969)、腹面が縦の剥離であるために、横剥ぎの剥片剥離技術を持つ国府型や宮田山型のナイフ形石器への位置づけは留保されたままで(天羽, 1970; 1976)、瀬戸内技法が県南にまで及んでいるのかどうかの解明が課題であった。

廿枝遺跡発見後、鎌木・高橋による瀬戸内編年の問題点が指摘されるようになり(柳田, 1977)、また、鎌木の提唱した瀬戸内技法も再検討され、翼状剥片の剥離の時に加撃点が同一打面を後退するという典型的なもののほかにも、打面転位がなされた石核も翼状剥片石核のヴァリエーションのひとつと考えられるようになってきた(松藤, 1974)。

そして廿枝遺跡のナイフ形石器の編年の位置についても再検討が行われた。その時に剥片類の分析から、主体的な縦長剥片剥離法とは別に横剥ぎ技法による瀬戸内技法的な要素の存在が指摘され、国府型ナイフ形石器の分布圏の南下が予想されていた(高橋, 1984)。

延野大原出土のサヌカイト製のナイフ形石器は、瀬戸内技法によってつくられた国府型ナイフ形石器である。盤状剥片、翼状剥片などの瀬戸内技法の工程を示す剥片・石核類が発見されておらず、石材が那賀川流域に産出するチャートではないので、県南地域で国府型ナイフ形石器がつくられたかどうかは不明であるが、国府型ナイフ形石器が完成品として持ち込まれていたことが確実となった。

1990年度の徳島県埋蔵文化財センターによる調査で、吉野川北岸の板野郡上板町柿谷遺跡においてチャート製の国府型ナイフ形石器が出土した(計盛ほか, 1991)。このことによって、絹川・中川(1992)はチャートを産出する秩父累帯の岩石が近くに分布している県

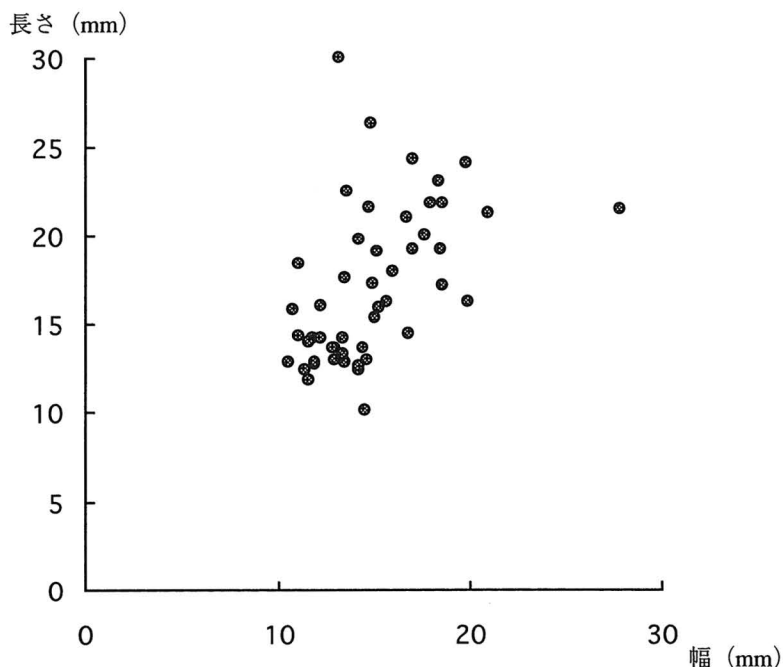


図18. 相生町鮎川西ノ宮の石鏃の大きさ。

南地方と吉野川流域との関連について言及した。

延野大原出土のサヌカイト製の国府型ナイフ形石器と柿谷遺跡出土のチャート製の国府型ナイフ形石器の存在によって、旧石器時代に徳島県南部と北部で石材の流通があったことがわかり、剥片の剥離技術についても徳島県南部へ瀬戸内技法が伝播していた可能性が高まった。

石鏃の形態 鮎川西ノ宮では566点の石鏃が採集されている。このうち全体の形のわかるものは50点足らずである。長さ1～3 cm、幅1～3 cmの間に含まれ(図18)、長さ2 cm未満の小型のものが多い。調整の方法は、側縁だけ加工するもの(図12-6, 14)や片面加工のもの(図12-3・4)もあるが、大部分は両面加工で、素材となった剥片の剥離面はほとんど残っていない。

形態的には凹基のものが圧倒的に多い。中でも正三角形(図12-4～8)や二等辺三角形(図12-9～23)に近い形で浅い抉りを持つものが多い。このタイプはいろいろな時期に出現しているので時期の特定はむずかしい。凹基のもので、抉りの深いもの(図13-1～9)の中には、図13-9の石鏃のように縄文時代早期の押型文土器に伴う鋏形鏃(八幡, 1979[1948])に類似したものが含まれていることなどを指摘できるが、表採資料であるため、一般的な傾向を示すだけで時期を断定できない。今後、土器との共伴関係がはっきりとした遺跡を調査する際に石鏃の形態についても詳しく調べる必要がある。

石材の搬入 ここでは旧石器時代、縄文時代、弥生時代を通して石材の搬入について考えてみることにする。サヌカイトは安山岩の一種で、四国では香川県の五色台、城山、金山などから産出する。九州では長崎県の多久が、近畿では奈良県と大阪府にまたがる二上

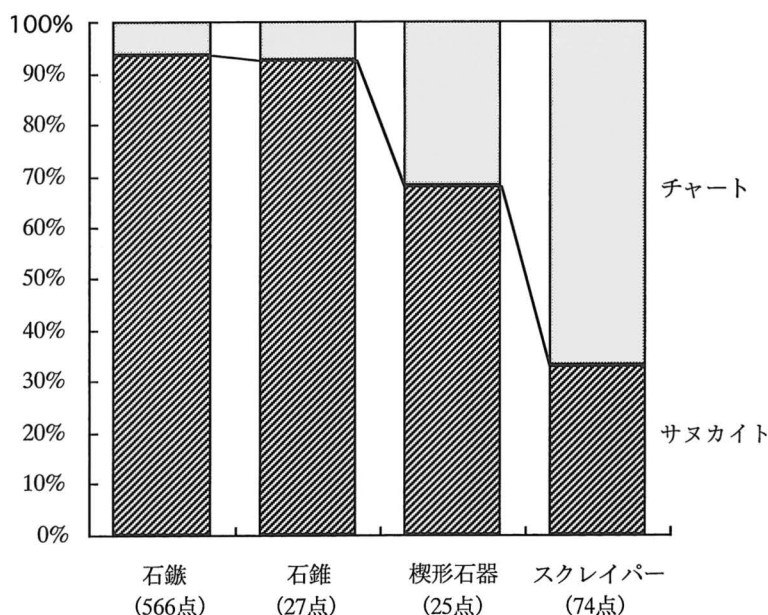


図19. 相生町鮎川西ノ宮の石器の石材(チャートとサヌカイト)の割合。

山が、産地として有名である。瀬戸内海沿岸を中心として旧石器時代から長く石器の石材として使われてきた。特に旧石器時代には、瀬戸内技法と呼ばれる横剥ぎの剥片剥離技術と結びついて、国府型ナイフ形石器の石材となった。

那賀川流域付近を東西に走る秩父累帯に属する地域では、石灰岩とともに良質のチャートが多く産出し、これが石器の石材として利用されている。旧石器時代、縄文時代の廿枝遺跡や縄文時代早期の古屋岩陰遺跡(上那賀町)では、ほとんどのナイフ形石器や石鏃がチャートでつくられている。剥片についても、チャートがほとんどでサヌカイトは2, 3片しか出土していない。これらのことから、県南ではチャート、県北の吉野川沿いではサヌカイトを石器の素材として使っていたと考えられる(天羽, 1970)など、2遺跡だけの資料によってこの地域の石器の石材が論じられてきた。しかし今回の調査によって、県南の那賀川流域の遺跡でもサヌカイトを多く使っているとわかった。

各地点の石材の内訳を見ると、日和佐町赤松野田、相生町西納・大久保森原・延野大原・谷内B・鮎川西ノ宮では、チャート剥片よりもサヌカイト剥片の方が多く採集されており、二次加工を加えた石器では、スクレイパーを除けば、9割前後にサヌカイトが用いられている。とくに600点近くある鮎川西ノ宮の石鏃では、サヌカイト製が9割以上をしめ、残りがチャート製で1点だけ珪質頁岩でつくられている(図19)。

サヌカイト剥片よりもチャート剥片が多い相生町蔭谷北・谷内A、阿南市新野町廿枝でも、二次加工のある石器の5, 6割にはサヌカイトが使われている。

ただしスクレイパーだけは3割にしかサヌカイトが使われておらず、チャートが7割近くに使われている。県南のチャートには石の節理などが発達しており、薄く入り組んだ加工には向かなかったのではないかと考えられる。実際に石鏃の中には節理に沿って割れてし

まっているものもある。また、チャートの原石を見ると、こぶしの半分くらいの大きさの円礫も使われている。これを打ち欠いて、いろいろな加工に適した剥片を得ることが、むずかしかったのではないと思われる。近くでチャートのような石材が手に入る那賀川流域においても、谷内B、鮎川西ノ宮のように、遅くとも縄文時代後期には、サヌカイトが多く使われるようになっていたのだと考えられる。

ちなみに1993年度の海部川流域の調査では、那賀川流域よりも石器自体の採集は少なかったが、採集されたチャートとサヌカイトの剥片の割合をみると、チャートの比率が低く、海部川流域でもサヌカイトを主な石材として使っていた可能性が高い。

黒曜石も石器の石材として多く使われる。西日本の産地としては、大分県の姫島と島根県の隠岐が有名である。今回の調査で、相生町の鮎川西ノ宮、西納と蔭谷北から姫島産と思われる黒曜石が採集された。姫島産の黒曜石を使った石器は、九州東部、四国西南部、中国地方西南部を中心に分布しており、瀬戸内沿いでは兵庫県加古川市の西山北遺跡で表採されているが、四国の東部での出土はまれである(木村, 1967; 潮見, 1980; 坂田, 1982)。高知県では、吉野川上流域の飼古屋岩陰遺跡が姫島産黒曜石の東限とされている(高知県教育委員会, 1983)。今回の調査により採集したものが姫島産であることが確定できれば、南四国での姫島産の黒曜石の分布範囲が、従来知られていたよりも東へとひろがったことになる。

また、姫島産の黒曜石が使われる時期については、大分県や山口県では後期旧石器時代からである(清水, 1982; 潮見, 1980)が、四国西南部、瀬戸内沿岸部で大量に使われるようになるのは縄文時代前期になってからで、轟B式土器が九州から東に伝えられたのに伴って運ばれたと考えられている(木村, 1978)。縄文時代後期以後、四国西南部においては石器の石材としての姫島産黒曜石は少なくなり、サヌカイトが多く使われるようになっていく(木村, 1987)。那賀川流域でもサヌカイトが多く使われるようになる縄文時代後期には、姫島産黒曜石はすでに使われなくなっていたのかどうか、四国西南部にみられる変化との対応関係を明らかにしていかなければならない。

今後の課題

今までほとんど縄文時代の遺跡の分布が知られていなかった那賀川流域において、遺物の散布のみの確認ではあるが、新たに33カ所の遺跡が発見された意義は大きい。今後はさらに分布調査を継続し、本来の遺跡分布のあり方を明らかにしなければならない。

那賀川流域では旧石器時代から縄文時代、弥生時代にかけて、石器の石材としてサヌカイトが使われていた。特に縄文時代後期以降はサヌカイトの比率が高くなる。縄文時代後期以前の県南における石器石材に占めるサヌカイトの割合を把握する必要がある。姫島産の黒曜石についても石材全体の中での検討が必要であらうし、石材の産地と那賀川流域を結ぶ地域における分布のあり方を明らかにすることによって、石材がどのようなルートで、どのような形で運ばれてきたのかについても考察を進める必要がある。

石器の石材同定については、現在のところは肉眼による観察に基づいての判定である。従ってサヌカイトとしたものの一部には頁岩が含まれる可能性も否定しきれないことから、今後、早急に専門家の鑑定や分析を受け、石質を明確にした上で議論を深める必要が

ある。

さらに、大量に採集した石器群の詳しい時期についても、現状では十分に明らかにされてはいない。これらの石器を採集した遺跡で、特徴のよくわかる縄文土器の発見に大いに努めなければならない。また、縄文土器を採集している鮎川西ノ宮では、できるだけ早く発掘調査を行うことで、縄文土器と石器群の相伴関係を明らかにし、それぞれの時期の石器の形態や組成の特徴をとらえることが求められる。

那賀川流域において新たな遺跡を発見したばかりで、石材の鑑定や遺跡の時期の確定など課題は多いが、今後の活動をととして解決していきたい。

謝 辞

調査にあたっては木頭村教育委員会、上那賀町教育委員会、相生町教育委員会、鷺敷町教育委員会、穴喰町教育委員会、海南町教育委員会、日和佐町教育委員会、および各地の文化財保護審議委員会の方々に便宜をはかっていただいた。本田義順氏には同氏が相生町で採集された資料を本調査のために提供していただいた。また、報告をまとめるにあたっては木村剛郎、岡村道雄、坂本嘉弘、清水宗昭、氏家敏之の各氏にお世話になった。ここに記して感謝する。

引用文献

- 天羽利夫．1970．徳島県下出土のナイフ形石器・細石器．徳島県博物館紀要，(1)：33-40．
- 天羽利夫・岡山真知子．1985．徳島の遺跡散歩．p. 1-284．徳島市立図書館，徳島．
- 天羽利夫・立花 博．1969．徳島県廿枝遺跡採集の石器：徳島県出土のナイフ形石器．古代学，16 (1)：81-88．
- 江坂輝彌・岡本健二．1967．四国地方の洞穴遺跡：概況．日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編，日本の洞穴遺跡，p. 219-223．平凡社，東京．
- 鎌木義昌・高橋護．1965．瀬戸内地方の先土器時代．日本の考古学Ⅰ：先土器時代，p. 284-302．河出書房新社，東京．
- 勝浦康守．1994．徳島市三谷遺跡—徳島の縄文晩期凸帯文土器の終焉—．文化財学論集刊行会，文化財学論集，p.23-30．文化財学論集刊行会，奈良．
- 計盛真一朗・谷匡人・池淵茂ほか．1991．試掘調査：柿谷遺跡．徳島県埋蔵文化財センター年報，2：59-62．
- 木村剛朗．1967．九州姫島産黒曜石よりみたる西四国縄文期の交易圏（上）．土佐史談，(124)：11-22．
- 木村剛朗．1978．姫島産黒曜石の交易—九州姫島産黒曜石よりみたる西四国縄文期の交易圏—，p. 1-63．木村剛朗，中村（高知県）．
- 木村剛朗．1987．西南四国縄文期のサヌカイト（漆黒黒曜石）交易．四万十川流域の縄文文化研究，p. 412-427．幡多埋文研，中村（高知県）．
- 絹川一徳・中川和哉．1992．特集・1991年の考古学界の動向：旧石器時代（西日本）．考古学ジャーナル，(347)：4-14．
- 高知県教育委員会．1983．飼古屋岩蔭遺跡調査報告書．p. 1-76．日本道路公団・高知県教育委員会，高知．
- 松藤和人．1980．瀬戸内技法の再検討．同志社大学旧石器文化談話会編，ふたがみ，p. 138-163．学生社，東京．
- 沖野舜二．1960．徳島県新野町民史．p. 1-566．新野町史編集委員会，阿南．
- 坂田邦洋．1982．九州産黒曜石からみた先史時代の交易について（1）．賀川光夫還暦記念論集編集委員会編，賀川光夫先生還暦記念論文集，p.159-194．賀川光夫先生還暦記念会，別府．
- 清水宗昭．1982．姫島産黒曜石とガラス質安山岩の分布について．賀川光夫還暦記念論集編集委員会編，賀川光夫先生還暦記念論文集，p. 139-149．賀川光夫先生還暦記念会，別府．

- 東明省三. 1985. 徳島県に見られる広域テフラとその教材化. 徳島県教育研修センター研究紀要, (67): 60-73.
- 潮見浩. 1980. 石器原材料としての姫島産黒曜石をめぐって. 内海文化研究紀要, (8): 43-65.
- 須鎗和巳・岩崎正夫・鈴木堯士編. 1991. 日本の地質8: 四国地方. 共立出版, 東京.
- 高橋正則. 1984. 徳島県阿南市・廿枝遺跡採集の石器再考. 旧石器考古学, (29): 77-86.
- 立花 博. 1970. 徳島県那賀郡上那賀町古屋岩蔭遺跡調査概報. 徳島市入田町内ノ御田瓦窯調査概報・徳島県那賀郡上那賀町古屋岩蔭遺跡調査概報, p. 12-19. 徳島県博物館建設記念学術奨励基金運用委員会, 徳島.
- 鳥居龍蔵. 1976 [1923]. 徳島城山の岩窟と貝塚. 鳥居龍蔵全集4. p. 525-534. 朝日新聞社, 東京.
- 八幡一郎. 1979 [1948]. 鍬形石鏃-石鏃の最古型式の一. 八幡一郎著作集2, p. 161-166. 雄山閣, 東京.
- 柳田俊雄. 1977. 瀬戸内東部及び近畿地方における旧石器時代研究の現状と問題点. プレリユード, (20): 1-13.

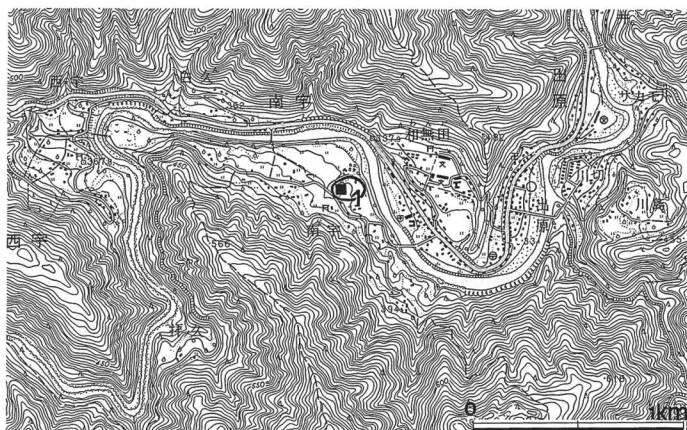


図20. 木頭村南宇オカダの遺物採集地点(国土地理院発行1:25000地形図「阿波出原」を使用). ■は遺物集中地点, 実線内は遺物散布範囲.

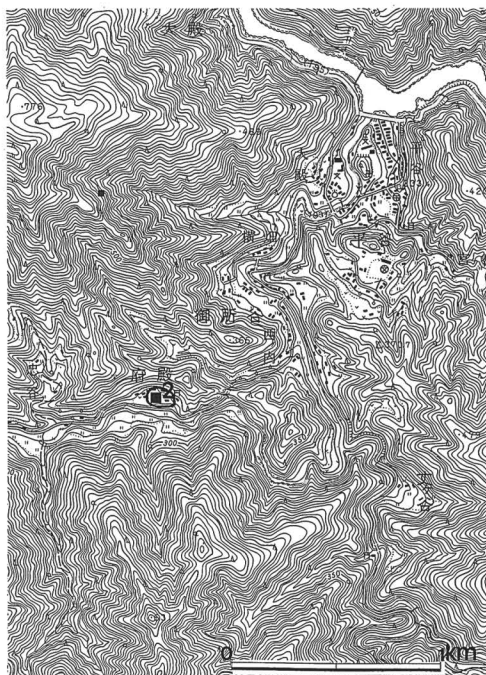


図21. 上那賀町府殿の遺物採集地点(国土地理院発行1:25000地形図「長安口貯水池」を使用). ■は遺物集中地点, 実線内は遺物散布範囲.

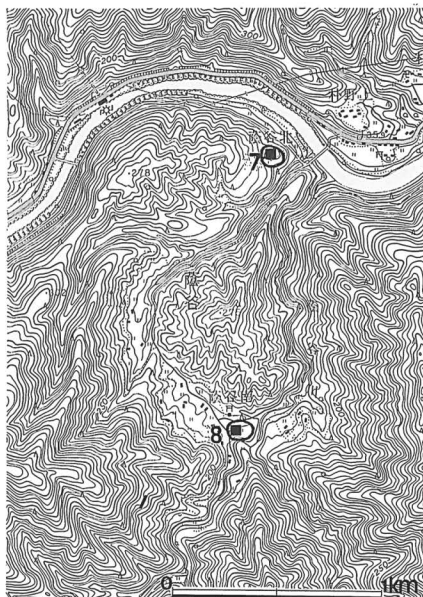


図22. 相生町蔭谷北(7)および蔭谷南(8)の遺物採集地点(国土地理院発行1:25000地形図「桜谷」を使用). ■は遺物集中地点, 実線内は遺物散布範囲.

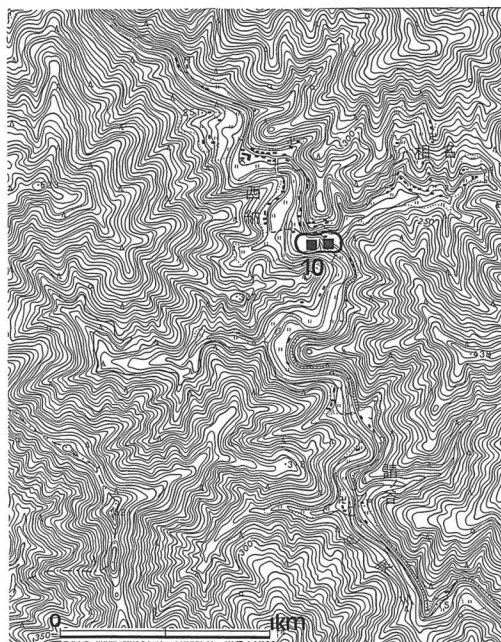


図23. 相生町西納の遺物採集地点(国土地理院発行1:25000地形図「桜谷」を使用). ■は遺物集中地点, 実線内は遺物散布範囲.

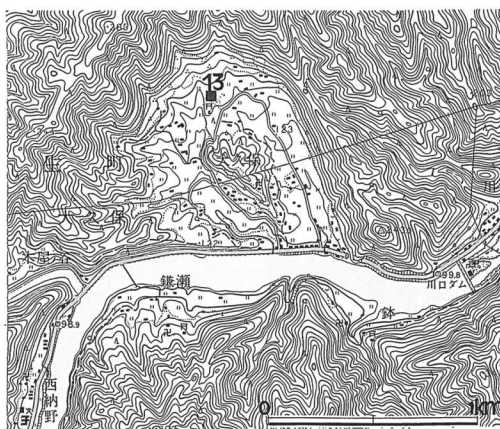


図24. 相生町大久保森原の遺物採集地点(国土地理院発行1:25000地形図「桜谷」を使用). ■は遺物集中地点.

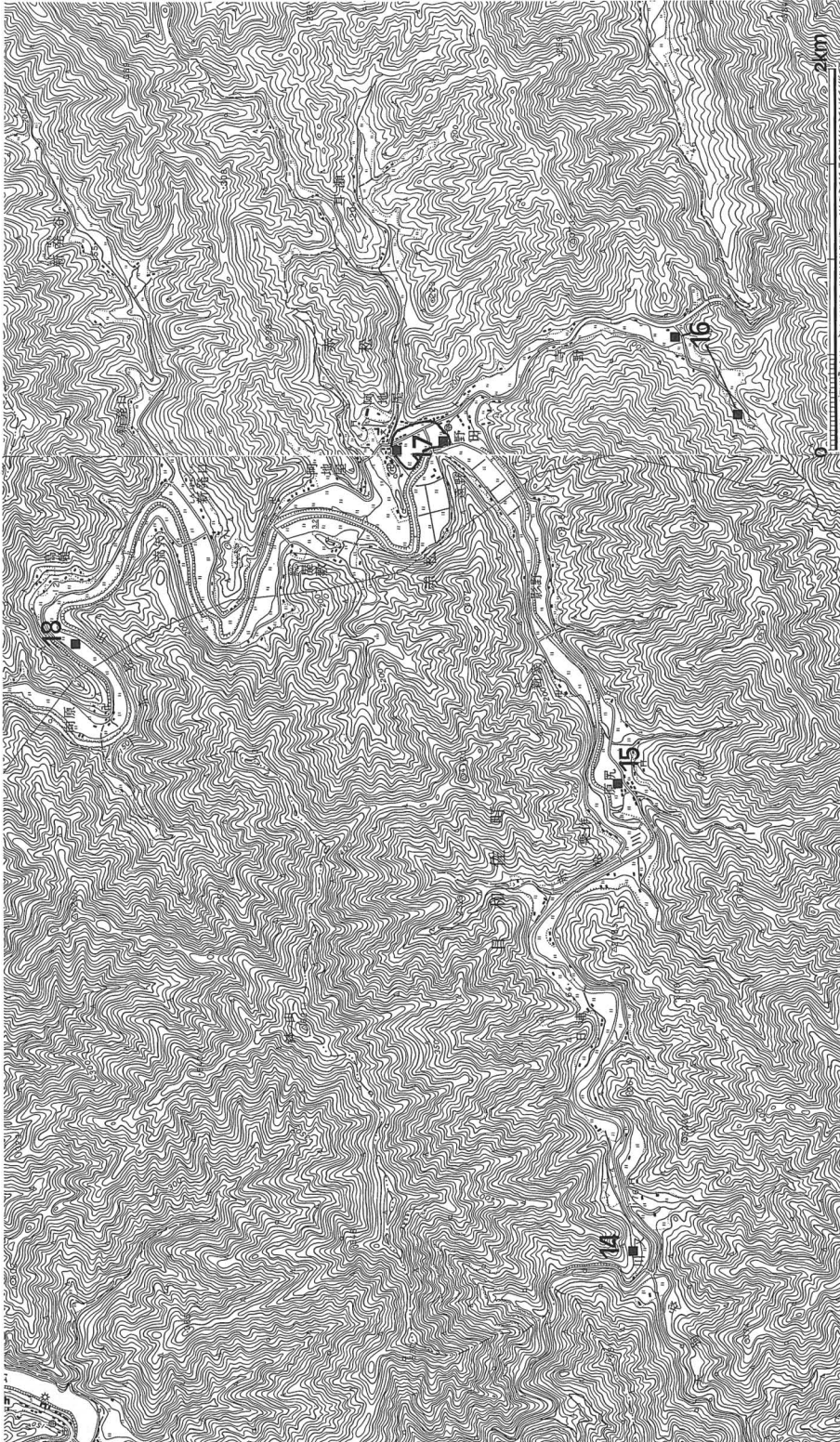


図25. 日和佐町赤松川又(14)、赤松原尻(15)、赤松上寺野(16)、赤松野田(17)および赤松高瀬(18)の遺物採集地点(国土地理院発行1:25000地形図「桜谷」「阿波由岐」を用). ■は遺物集中地点, 実線内は遺物散布範囲.

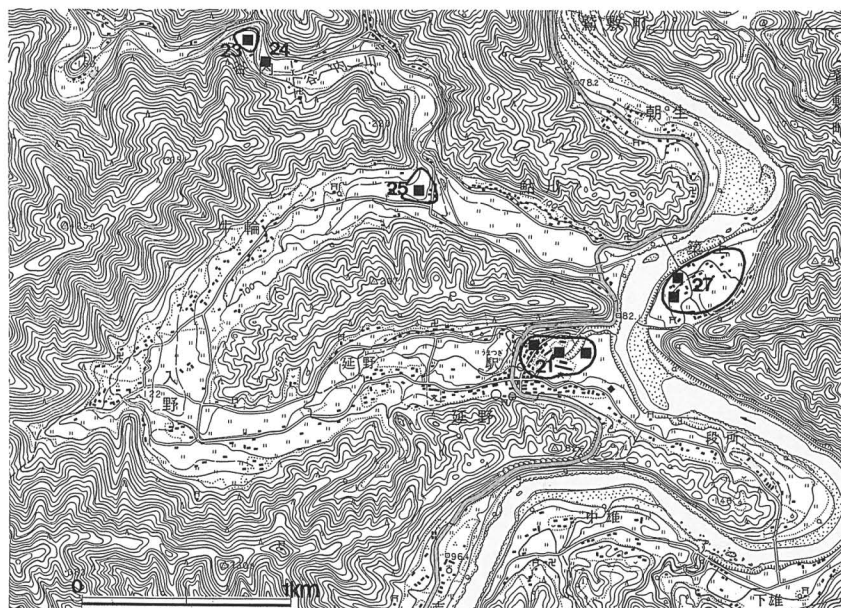


図26. 相生町延野大原(21), 谷内A(23), 谷内B(24), 鮎川西ノ宮(25)および築ノ上(27)の遺物採集地点(国土地理院発行1:25000地形図「桜谷」を使用)。■は遺物集中地点, 実線内は遺物散布範囲。



図27. 鶯敷町阿井の遺物採集地点(国土地理院発行1:25000地形図「阿井」を使用)。■は遺物集中地点, 実線内は遺物散布範囲。

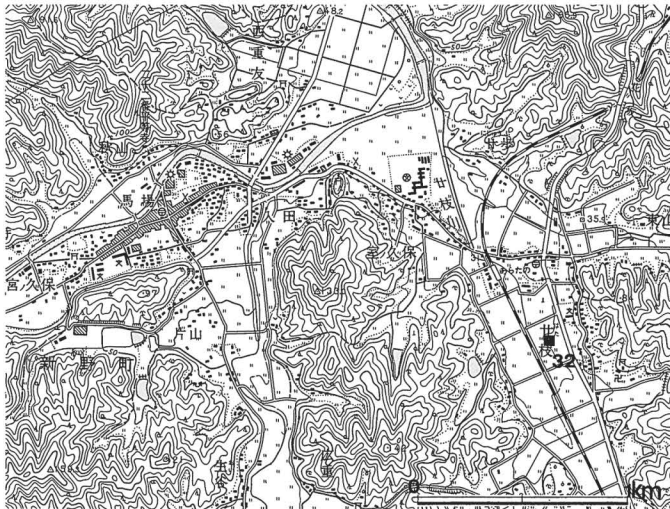


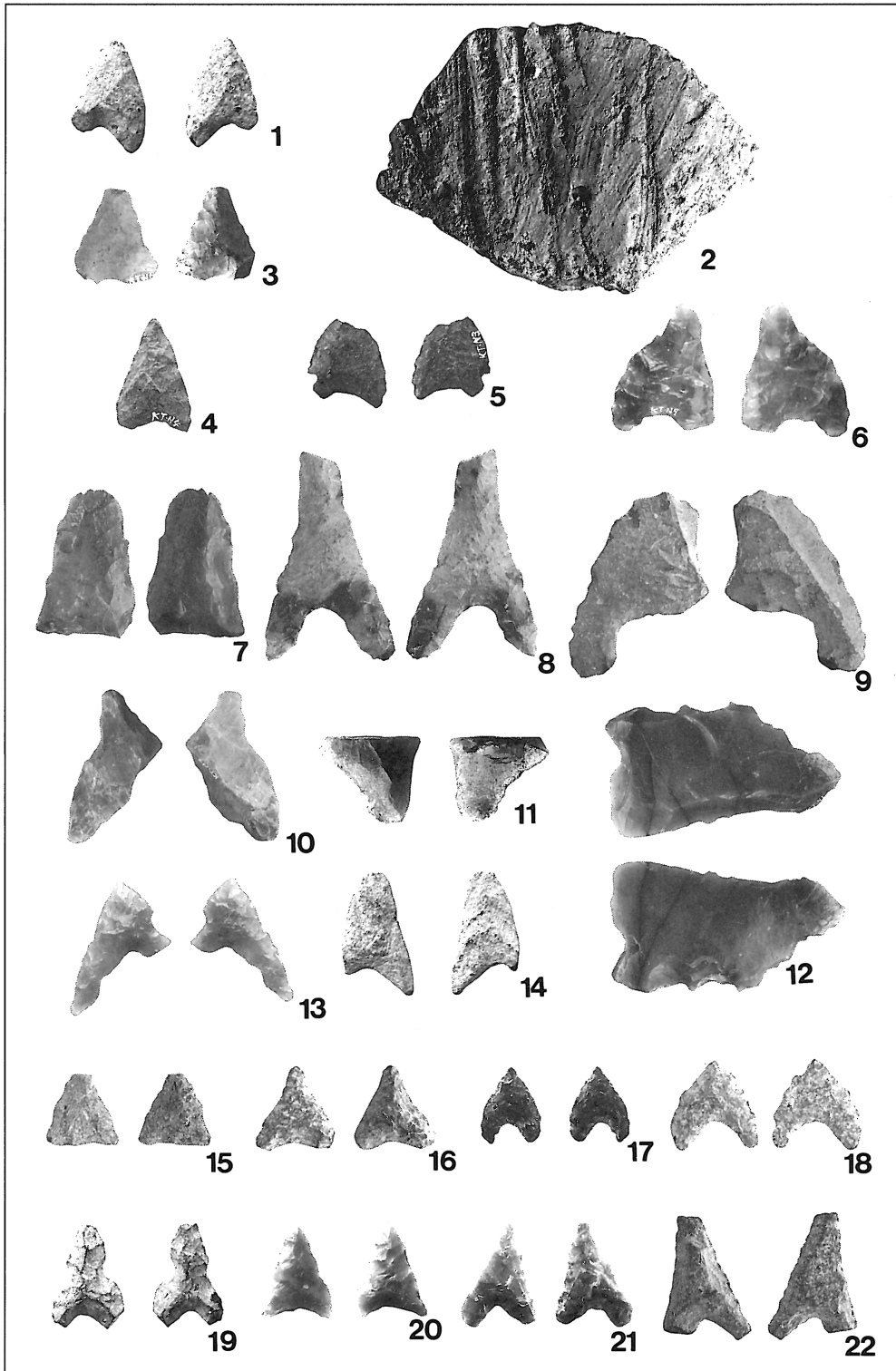
図28. 阿南市新野町廿枝の遺物採集地点(国土地理院発行1：25000地形図「馬場」を使用)．■は遺物集中地点．

図版1の説明

石器および縄文土器。ほぼ実物大。

1. 石鏃。木頭村南宇オカダ。図2-1と同一資料。
2. 縄文土器。上那賀町府殿。図2-2と同一資料。
3. 石鏃。相生町蔭谷北。図3-1と同一資料。
4. 石鏃。相生町蔭谷北。図3-2と同一資料。
- 5～7. 石鏃。相生町蔭谷北。
8. 石鏃。相生町蔭谷北。図3-3と同一資料。
9. 石鏃未製品。相生町蔭谷北。
10. 石錐。相生町蔭谷北。図3-4と同一資料。
- 11, 12. スクレイパー。相生町蔭谷北。図3-5, 6と同一資料。
- 13, 14. 石鏃。相生町蔭谷南。図3-7, 8と同一資料。
15. 石鏃。相生町西納。図4-1と同一資料。
- 16, 17. 石鏃。相生町西納。
18. 石鏃。相生町西納。図4-4と同一資料。
19. 石鏃。相生町西納。図4-6と同一資料。
20. 石鏃。相生町西納。図4-2と同一資料。
21. 石鏃。相生町西納。
22. 石鏃。相生町西納。図4-7と同一資料。

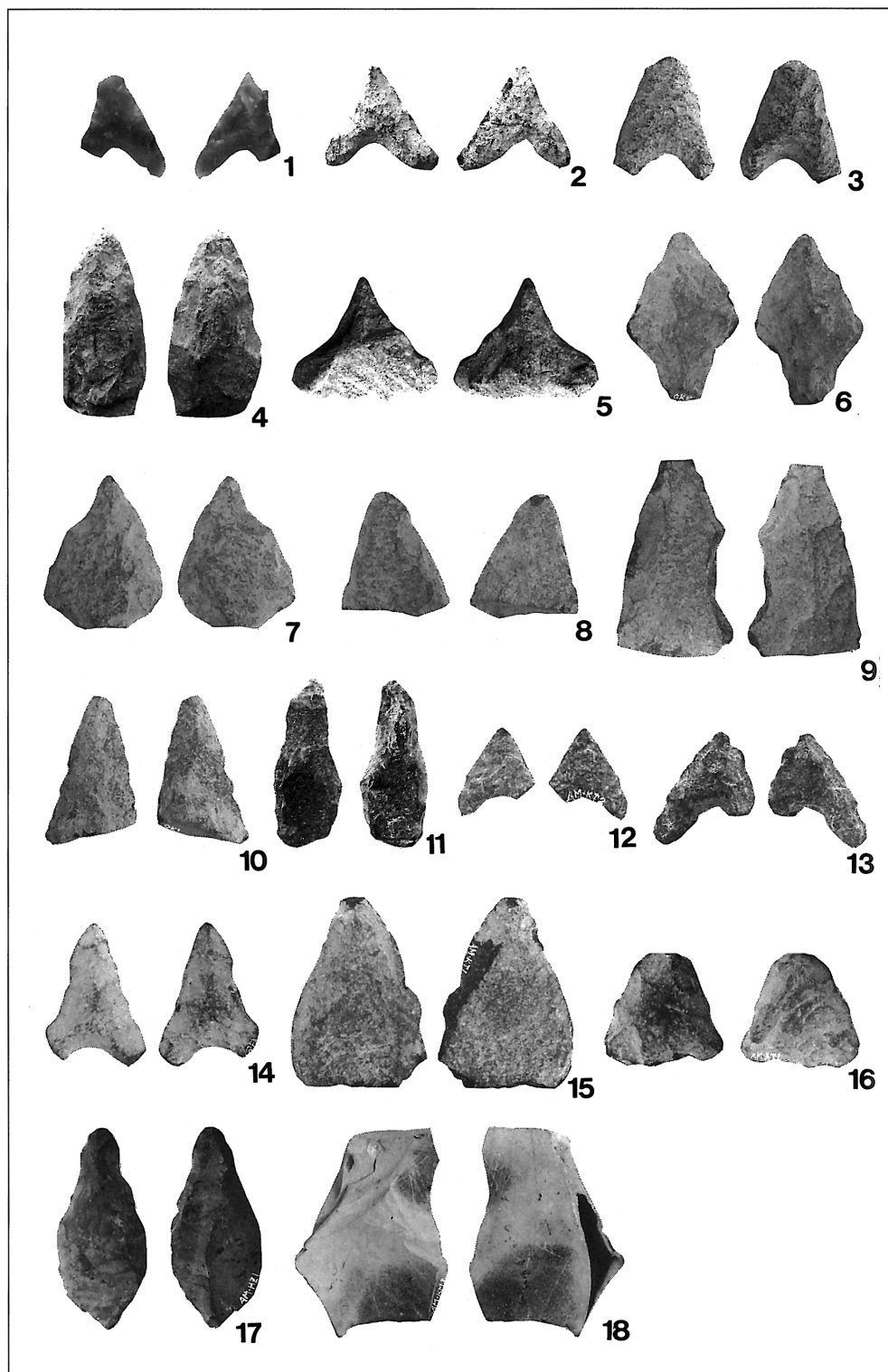
図版1



図版2の説明

石器．ほぼ実物大．

- 1．石鏃．相生町西納．
- 2．石鏃．相生町西納．図4-5と同一資料．
- 3．石鏃．相生町西納．
- 4，5．石鏃．相生町西納．図4-8，9と同一資料．
- 6，7．石鏃．相生町大久保森原．図5-1，2と同一資料．
- 8～10．石鏃．相生町大久保森原．
- 11．石錐．相生町大久保森原．図5-3と同一資料．
- 12．石鏃．日和佐町赤松上寺野．図6-1と同一資料．
- 13～15．石鏃．日和佐町赤松野田．図6-3～5と同一資料．
- 16．石錐．日和佐町赤松阿地屋．図6-6と同一資料．
- 17．石錐．日和佐町赤松原尻．図6-7と同一資料．
- 18．石匙？日和佐町赤松川又．図6-8と同一資料．

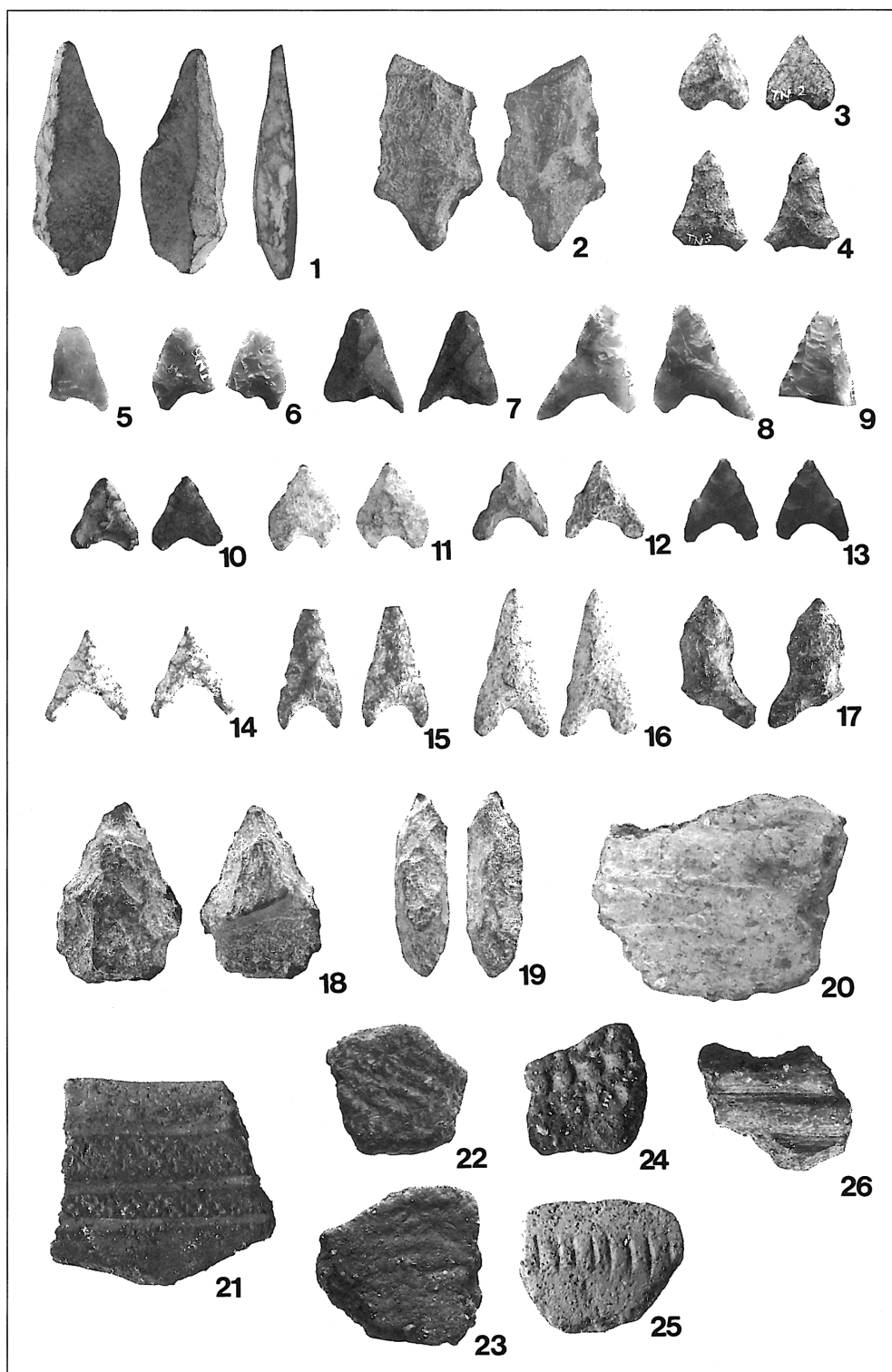


図版3の説明

石器および縄文土器。ほぼ実物大。

1. ナイフ形石器。相生町延野大原。図7-1と同一資料。
2. 石鏃。相生町延野大原。図7-3と同一資料。
- 3, 4. 石鏃。相生町谷内A。図8-3, 4と同一資料。
5. 石鏃。相生町谷内A。
6. 石鏃。相生町谷内A。図8-2と同一資料。
7. 石鏃。相生町谷内A。図8-7と同一資料。
8. 石鏃。相生町谷内A。図8-10と同一資料。
9. 石鏃。相生町谷内A。図8-11と同一資料。
10. 石鏃。相生町谷内B。図9-1と同一資料。
- 11～13. 石鏃。相生町谷内B。
- 14, 15. 石鏃。相生町谷内B。図9-2, 3と同一資料。
16. 石鏃。相生町谷内B。
- 17, 18. 石鏃。相生町谷内B。図9-4, 5と同一資料。
19. 石錐。相生町谷内B。図9-6と同一資料。
20. 縄文土器。相生町谷内B。図9-7と同一資料。
21. 縄文土器。鮎川西ノ宮。図10-1と同一資料。
22. 縄文土器。鮎川西ノ宮。図10-3と同一資料。
23. 縄文土器。鮎川西ノ宮。図10-2と同一資料。
24. 縄文土器。鮎川西ノ宮。図10-4と同一資料。
25. 縄文土器。鮎川西ノ宮。図10-5と同一資料。
26. 縄文土器。鮎川西ノ宮。図10-7と同一資料。

図版3



図版4の説明

黒曜石剥片．ほぼ2倍大．

1～4．相生町鮎川西ノ宮．図11-1～4と同一資料．

5．相生町鮎川西ノ宮．

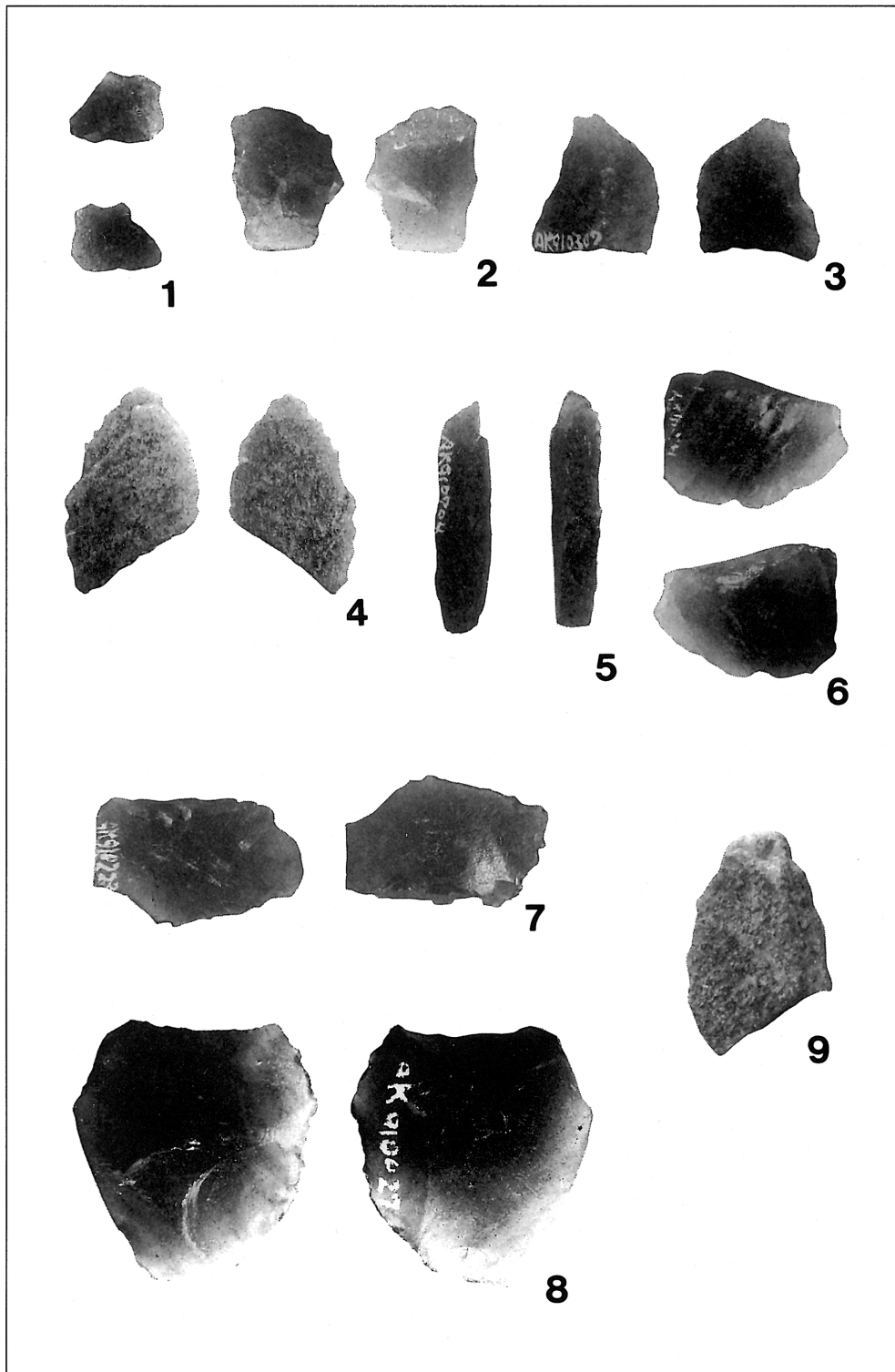
6．相生町鮎川西ノ宮．図11-6と同一資料．

7．相生町鮎川西ノ宮．図11-5と同一資料．

8．相生町鮎川西ノ宮．図11-7と同一資料．

9．相生町鮎川西ノ宮．

図版4

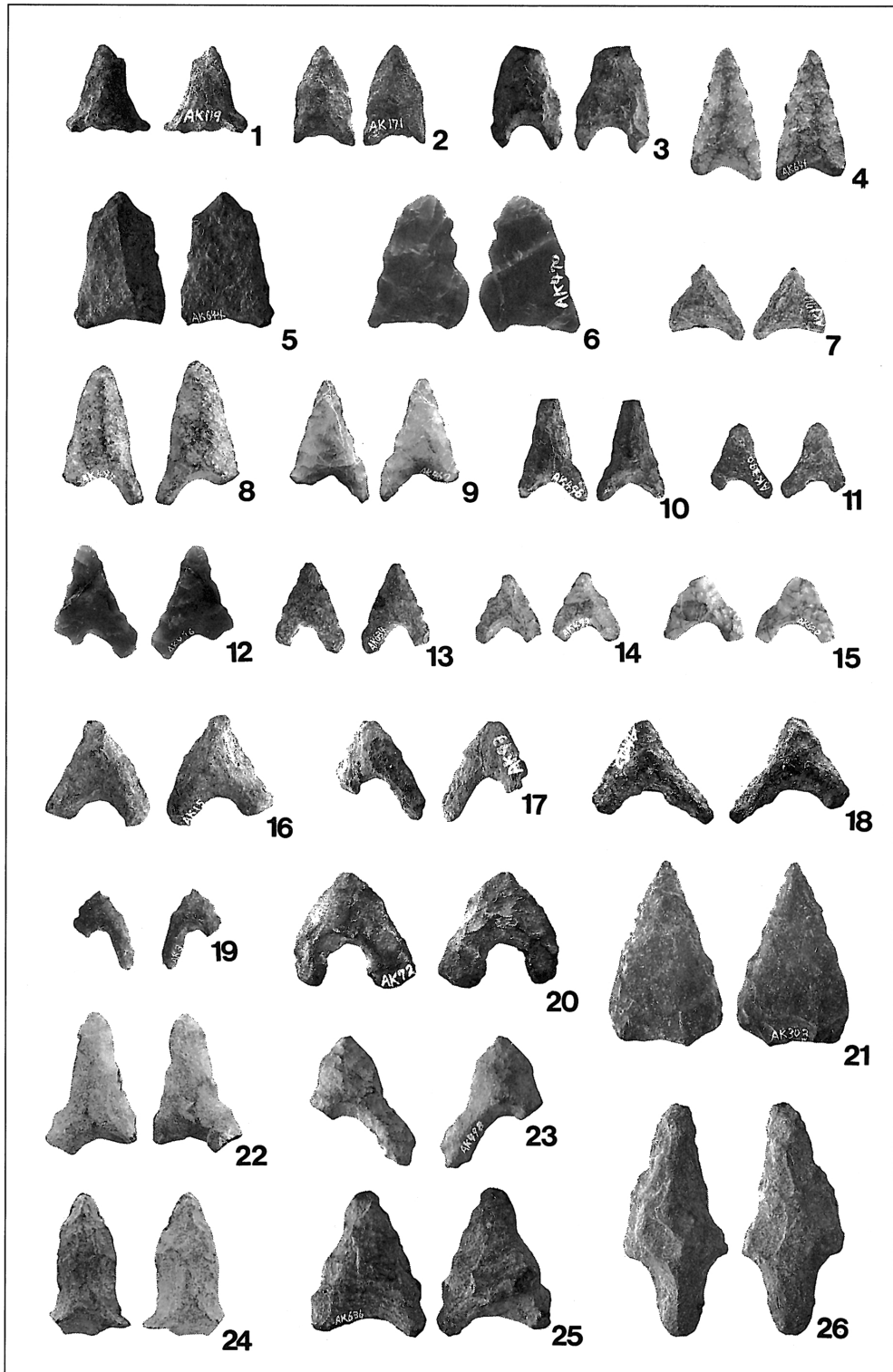


図版5の説明

石鏃. ほぼ実物大.

1. 相生町鮎川西ノ宮. 図12-1と同一資料.
- 2～4. 相生町鮎川西ノ宮.
- 5～7. 相生町鮎川西ノ宮. 図12-2～4と同一資料.
- 8～10. 相生町鮎川西ノ宮. 図12-11～13と同一資料.
11. 相生町鮎川西ノ宮. 図12-18と同一資料.
12. 相生町鮎川西ノ宮. 図12-22と同一資料.
13. 相生町鮎川西ノ宮. 図12-19と同一資料.
14. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-1と同一資料.
15. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-2と同一資料.
16. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-4と同一資料.
17. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-6と同一資料.
18. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-7と同一資料.
19. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-3と同一資料.
20. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-9と同一資料.
21. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-15と同一資料.
22. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-10と同一資料.
23. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-13と同一資料.
24. 相生町鮎川西ノ宮.
25. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-14と同一資料.
26. 相生町鮎川西ノ宮. 図13-16と同一資料.

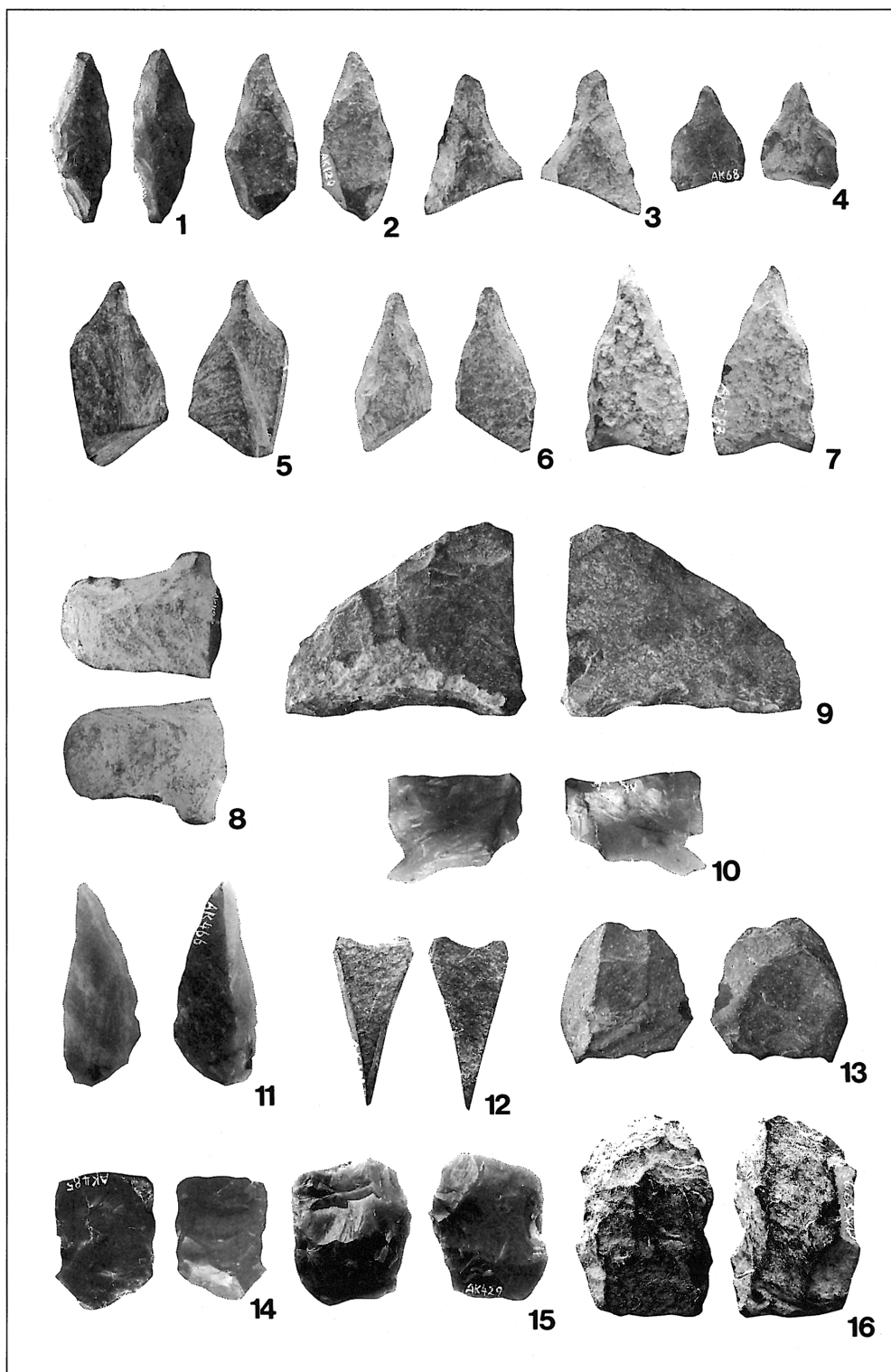
図版5



図版6の説明

石錐，石匙，スクレイパーおよび楔形石器．ほぼ実物大．

1. 石錐．相生町鮎川西ノ宮．図14-1と同一資料．
2. 石錐．相生町鮎川西ノ宮．図14-2と同一資料．
3. 石錐．相生町鮎川西ノ宮．図14-4と同一資料．
4. 石錐．相生町鮎川西ノ宮．図14-6と同一資料．
5. 石錐．相生町鮎川西ノ宮．図14-7と同一資料．
6. 石錐．相生町鮎川西ノ宮．図14-9と同一資料．
7. 石錐．相生町鮎川西ノ宮．図14-8と同一資料．
8. 石匙．相生町鮎川西ノ宮．図14-10と同一資料．
- 9, 10. スクレイパー．相生町鮎川西ノ宮．図14-11, 12と同一資料．
- 11, 12. スクレイパー．相生町鮎川西ノ宮．
- 13～15. 楔形石器．相生町鮎川西ノ宮．図15-1～3と同一資料．
16. 楔形石器．相生町鮎川西ノ宮．



図版7の説明

石器．ほぼ実物大．

1. 石鏃．相生町築ノ上．図16-2と同一資料．
2. 石鏃．相生町築ノ上．図16-1と同一資料．
3. 石鏃．相生町築ノ上．
4. 石鏃．鷺敷町阿井．
- 5, 6. 石鏃．鷺敷町阿井．図16-3, 4と同一資料．
7. 石鏃．阿南市新野町廿枝．図17-1と同一資料．
8. 石鏃．阿南市新野町廿枝．
9. 石鏃．阿南市新野町廿枝．図17-4と同一資料．
10. 石鏃．阿南市新野町廿枝．図17-2と同一資料．
11. 石鏃．阿南市新野町廿枝．図17-3と同一資料．
12. 石鏃．阿南市新野町廿枝．
13. 石鏃．阿南市新野町廿枝．図17-5と同一資料．
14. 石鏃．阿南市新野町廿枝．図17-7と同一資料．
15. 石鏃．阿南市新野町廿枝．図17-6と同一資料．
16. 石錐．阿南市新野町廿枝．図17-8と同一資料．
17. 石斧．阿南市新野町廿枝．図17-9と同一資料．

図版7

